公開資料

戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）
研究開発領域「犯罪からの子どもの安全」
研究開発プログラム「犯罪からの子どもの安全」
研究開発プロジェクト

「演劇 WS をコアとした地域防犯ネットワーク構築プロジェクト」

研究開発実施終了報告書

研究開発期間　平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月

平田オリザ

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター　教授

目次

1. 研究開発プロジェクト

2. 研究開発実施の要約
2-1. 研究開発目標・・・２
2-2. 実施項目・内容
2-3. 主な結果・成果・・・３
2-4. 研究開発実施体・・・　５

3. 研究開発実施の具体的内容
3-1. 研究開発目標・・・６
3-2. 実施項目・・・９
3-3. 研究開発結果・成果・・・１２
3-4. 今後の成果の活用・展開に向けた状況・・・４９
3-5. プロジェクトを終了して・・・４９

4. 研究開発実施体制
4-1. 体制　・・・５０
4-2. 研究開発実施者・・・５４
4-3. 研究開発の協力者・・・５５

5. 成果の発信やアウトリーチ活動など
5-1. ワークショップ等・・・５５
5-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など・・・57
5-3. 論文発表・・・57
5-4. 口頭発表・・・57
5-5. 新聞報道・投稿、受賞等・・・58
5-5. 特許・出願・・・58

1．研究開発プロジェクト

(1)研究開発領域：犯罪からの子どもの安全
(2)領域総括　　：片山 恒雄
(3)研究代表者　：平田オリザ
(4)研究開発プロジェクト名：演劇 WS をコアとした地域防犯ネットワーク構築プロジェクト
(5)研究開発期間：　平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月

2．研究開発実施の要約

2-1．研究開発目標

演劇 WS の手法を用い、防犯啓発劇を子どもたちが自ら作り、発表までを行うプログラムを研究開発する。防犯教育を演劇 WS で行う大きな意義は、座学による学習で「頭で理解する」のにとどまらない、「主体的に学習に参加し、頭と五感で体感する」ことである。

防犯をテーマとした台本づくりをする事により、「自分だったらどうする？」「自分の通学時はどうだろう？」という、防犯への意識・知識のレベルを向上する事ができ、劇の練習と発表を通じて、疑似体験とその記憶の定着を期待できる。さらに、創作したお芝居の発表を通じて、地域への防犯啓発を行い、地域防犯の意識向上が図られるという二次的な効果も大いに期待できる。

本プロジェクトでは、以上の防犯演劇 WS と連動した Web コンテンツ（演劇 WS 支援用映像ツール、e-ラーニング教材、連絡ツールの 3 つのコンテンツ群）を研究開発する。演劇 WS と Web コンテンツを組み合わせることにより、一過性の WS 企画では無く、継続性、広域性を備えたインフラ的プログラムを目指す。
このコンテンツを通じて子どもと親、さらに地域防犯力の向上に不可欠な親と親とのコミュニケーションが生まれることが期待され、コンテンツの持つ効果の実証データ集計を行うことで、継続可能な施策として自治体などに政策提言を行う。

演劇を用いたコミュニケーション教育の有効性は広く認められ、その人材育成、学校現場への導入も急速に進みつつある。この流れの中で、コミュニケーション教育の手法を活用した防犯教育プログラムの開発が本件の目的となる。

2-2．実施項目・内容

「統括グループ」
・研究チームの統括
・全体スケジュールの管理

「WS コンテンツ開発・研究グループ」
・防犯演劇 WS コンテンツ開発、研究、実施
・防犯 CT 人材育成

「防犯 CT 育成グループ」
・防犯 CT 人材育成、育成プグラムの開発
・防犯演劇 WS コンテンツの活用、および社会実装モデルの検証
モデルとなる WS コンテンツの開発、及びその実施（WS コンテンツ開発グループとともに）

「社会実験・評価グループ」
・演劇 WS 実施（社会実験）のコーディネイト、WS 提案書作成
本プロジェクトにおける社会実装のための評価手法の開発、効果測定結果のとりまとめ、
実施後の報告書作成

「政策化・実装グループ」
・施策推進を図るために想定された典型モデルのアウトプット
プロジェクトを通じて実践的に研究された内容の整理し、防犯演劇 WS 導入・企画開発パッケージの制作

「Web コンテンツ開発グループ」
・Web コンテンツの開発・制作
「親子の学びを繋ぐ連絡帳」をコンセプトに、子供が親と一緒に WS での学習を振り返るための、事後共有をメインとしたウェブサイトを制作

2-3. 主な結果・成果

○社会実装を想定したコンテンツ開発

WS コンテンツグループと防犯 CT 育成グループが取り組んできた、演劇発表を軸とした防犯演劇 WS コンテンツを社会実装するためのモデルシミュレーションとプログラム整理・策定を行った。

以下の２つの防犯 WS パッケージコンテンツを完成させた。
１）単発コンテンツ「あんぜんパワーアップセミナー」
２）4 日間の防犯演劇 WS

以下の 4 つの防犯 WS メタコンテンツを完成させた。
１）対リアル犯罪単発コンテンツ「あんぜんパワーアップセミナー」
２）対リアル犯罪コンテンツ「暴犯団から身を守れ」(防犯標語『いかのおすし』を活かしたコンテンツ)（添付資料台本 1)
３）対リアル犯罪コンテンツ「お地蔵さんを探せ！」(あんぜんパワーアップセミナーとの融合コンテンツ)（添付資料台本 2-1(公募)　2-2（学校))
４）サイバー犯罪　「暴犯団から身を守れ 2.0」(くりのあかだし）添付資料台本 3)

○防犯 CT 人材育成、育成プログラム策定、及び防犯 WS の実施

防犯 CT を＜防犯に必要な知識を有した上で、演劇ならではの効果を活用し、犯罪から自らを守るために必要不可欠な“予防（よく見る／よく聞く)”“対処（逃げる／伝える)”といった要素の具体的な体験と獲得を目指した WS プログラムを、様々な教育現場や地域と連携して企画し、子どもたちに対して実践することができる人材＞として定義し、平成 22 年度から防犯 CT 育成のための「ワークショップ・ファシリテーター育成講座」をスタートさせた。

2 年半に渡る研修と実践の結果、様々なコンテンツを活用した防犯 WS を実施することができる防犯 CT を関東で 13 名、関西で 5 名育成することができた。

防犯 CT 育成の過程で、「あんぜんパワーアップセミナー」等、比較的短時間で効率的に実施が可能な防犯演劇 WS 演劇コンテンツの開発し、これらの WS コンテンツの習得と実践、及び成果と課題の共有を研修の中で大きな柱として位置付けることで、人材の育成と防犯 WS コンテンツの精査／検証を同時進行的に行うことができた。コンテンツそのものが非常にコンパクトで実施がしやすいため、予想以上に多くの現場からの依頼をいただいたことも、コンテンツの社会実験と人材育成の実地研修の機会の確保することができた大きな要因となった。

○防犯演劇WSの効果測定のための概念モデルおよび測定指標（質問紙）の作成

「子どもの防犯」に関連する知見や概念の整理・構造化をし、防犯演劇WSの教育効果についての「概念モデル」としてとりまとめるとともに、防犯演劇WSの効果測定をするための調査手法の検討や小学校低学年（1年生）にも使用可能な測定指標の開発を行った。まず、平成21年度には効果測定の方針を検討するとともに、先行知見の収集や社会実験時での保護者からの意見収集を実施。翌22年度には21年度に得た資料をもとに考察を進め、防犯演劇WSの教育効果についての仮説を取りまとめた「概念モデル」と測定指標（質問紙）を作成し、京都社会実験時に予備調査を実施した。23年度には、22年度の社会実験時の調査データおよび，比較対照校（WS非実施校）での調査データの分

析を重ね、指標の妥当性や仮説通りの結果が得られるか等の検討をして「概念モデル」の改良と測定指標（質問紙）の精緻化を行った。

○防犯演劇WSの効果検証

平成23年度の枚方社会実験および京都社会実験において、作成された測定指標（アンケート）を用いたWS事前・事後での効果検証調査を実施した。分析の結果、子どもの「リスク認知」などの防犯行動をとるために重要であると考えられる「防犯に対する態度」が上昇していることが確認された。保護者の効果は発表会への参加等の条件によって異なると考えられ、発表会が無かった京都社会実験では効果が確認できなかった。なお、今回のプロジェクトでは比較対照群が設定できなかったこと、WSのプログラム内容等の実施条件の違いによって効果にどのような差異が生じるのかの検証が不十分であること、演劇WS独自の効果は何かという点について検証が不十分であることは課題であり、また実験的方法や観察的方法の可能性等についても今後考察を進めることが重要である。

○防犯演劇WSの関係者による評価の確認

防犯演劇WSについて、保護者，実施主体者（学校の先生）、コミュニケーションティーチャー、有識者のそれぞれから多角的に確認を行った。WSに参加した子どもの保護者からは概ね高い評価を得られ、多数が防犯演劇WSのことをよく子どもと話しているなど関与の高さも確認できた。実施主体者とコミュニケーションティーチャーに対しては同一の項目によるヒアリングを実施しそれぞれの認識の共通点や相違点等をとりまとめた。その結果、子どもたちの主体性等の成長など直接防犯に関わらない部分での評価も共通して高いことが確認できた一方で、WSでの子どもへの接し方が普段の学校の方針と違う部分がある点など今後の留意点も明らかになった。有識者に対しては、プログラムのコンテンツ内容や効果検証の結果について議論を行いフィードバック行った。

○概念モデルおよび測定指標（質問紙）の作成

調査のデータ分析（21年度の京都での社会実験時の事後調査、WSを実施していない比較対象校調査、22年度の枚方での社会実験時の事前・事後調査）および、過去のリスク研究（上市・楠見 1998、2000、2006）※1等において扱われている概念を参考にして概念モデルを作成した。
その後，概念モデルに合わせて測定指標（質問紙）を作成した。

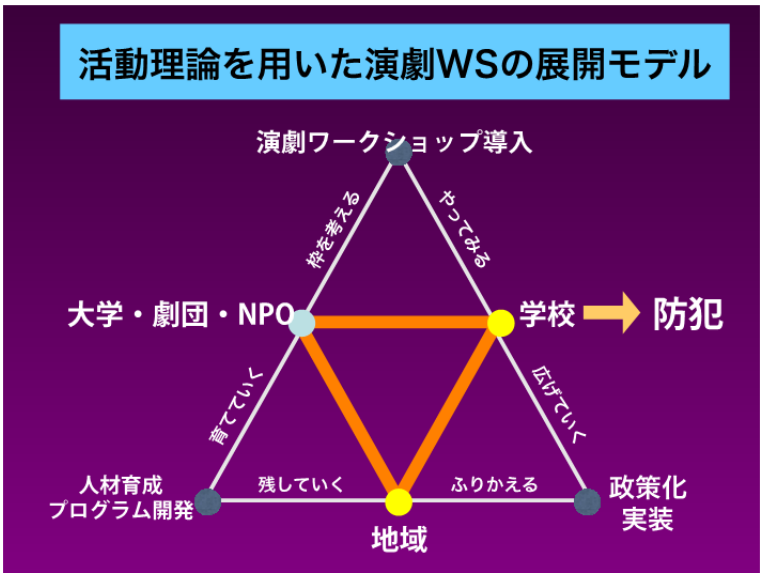
○　防犯演劇WS実施校（22年度京都社会実験）と非実施校の比較検討

質問紙の改善点等を検討するために、防犯演劇 WS を実施していない比較対象校 2 校（公立の小学校）において同様の質問紙を用いた調査を実施し、学校間で回答結果に違いが見られるかどうかを確認した。

子どもについて結果をみると、「知識」はどの学校でも正答がほとんどを占めたのに対して、リスク認知や主張性などの「態度」は WS を実施した学校の児童の方が実施していない学校の児童よりも正答率が高かった。ワークショップ効果によるものかどうかは、1 時点の調査であり対象の基本的な条件（公立／私立や、学校環境の違い、通学手段の違いなど）が異なるために判別できないが、「態度」には子どもが置かれる状況や条件によって何らかの違いが見られるということを確認できた。なお、保護者についても子どもと同様の傾向がみられた。

○地域防犯・安全の演劇 WS 展開モデル作成

地域防犯・安全の演劇WSがどのように展開されているかについて、事例からモデル化し、提示する。モデル化の際に用いたのは、Engestro¨m（1987）による「文化歴史的活動理論（culturalhistoricalactivity theory）」である。この理論においては、行為を道具に媒介されたものとして捉えたヴィゴツキーの議論をふまえ、主体と媒介手段と対象の三項図式に、さらにコミュニティ、ルール、分業の三項を導入したものだ。よって、この6項について、WSの現場を現象学的に記述すると、以下の図に、そしてそれらの担い手の役割について表のようにまとめることができる。



○防犯演劇WS導入・企画開発パッケージ制作

平成22年度・23年度に、自治体での制度化、条例制定などの在り方について、大阪市、枚方市、宇治市、奈良市等をフィールドに、PTA・自治体職員・警察官・地方議会議員の方々と共に検討を重ねてきた。その結果、自治体における制度化においては、基本となる「施策モデル」が機能しないであろうことが明らかとされた。理由として、

（1）自治体で条例化ということは、具体的な実装の為にはくくりとしては大雑把すぎる。

（2）施策レベルにおいて、自治体で決めたものをトップダウンで落としていくというのは、意思決定のスピードや財政状況から見て、現実的ではなく、自治体内の各地域の多様性に対応できない。

（3）各地の地域防犯プログラムの実装例・実施例をみてみると、起爆となる人材（コーディネータやコミュニティの中心人物）の存在が極めて重要であり、必要条件である。そういった人材から、ボトムアップで自治体に情報や提案が上がって行き、自治体を絡めた施策となる。という共通性がある。

これらの知見から、「地域防犯について、何かやりたい・取り組みたい」という動機を持ち、ある程度コーディネータとしての資質も持っている、地域住民、保護者、PTA、教員の中の潜在的な「起爆と成りうる」人材が、具体的な施策に取り組めるだけの素材・知見・手法を提供できるスターターキット「防犯演劇 WS 導入・企画開発パッケージ」を制作した。

○　Webコンテンツ「まもりーだー」開発

ワークショップでの学びを経験として長い時間定着させる為には、「事前学習」と「振り返り」が重要であると考え、ワークショップ前･後の学習を支えるツールとして『まもりーだーon facebook』を立ち上げ、運営した。

○　WS支援映像ツール制作

防犯演劇 WS の事前、事後学習、学習支援ツールとして、「あんぜんパワーアップセミナー」の要素を含んだ、自宅学習映像「安全まもるくん」を制作した。

○「演劇ワークショップをコアとした地域防犯ネットワークの構築」まとめサイト制作

本プロジェクトの成果をまとめた、まとめサイトを制作した。
主な内容は以下に表記する。

1）演劇ワークショップ振り返りサイト「まもりーだー」デモサイト
Webコンテンツグループが開発した、まもりーだーon facebookのデモサイトを作成。

2）アーカイブ
・防犯演劇WS導入・企画開発パッケージ　PDFファイル

・開発した防犯WSのコンテンツ群（台本、レジュメ）
・アンケート用紙（子ども向け　事前／事後）
・WSの様子が分かる写真
・WS 実施の際の告知用の雛形チラシ

2-4. 研究開発実施体制

「統括グループ」
平田オリザ（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター　教授）
研究グループマネジメント

「防犯CT育成グループ」
平田オリザ（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター　教授）
防犯CTの育成／防犯演劇WSコンテンツ開発・研究

「WSコンテンツ開発・研究グループ」
蓮行（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター　特任講師）
防犯CTの育成／防犯演劇WSコンテンツ開発・研究

「社会実験・評価グループ」
坂田充（NPO法人JAE）
社会実験にてアンケート調査実施／効果測定のモデル検証／アンケート内容の精査

「Webコンテンツ開発グループ」
伊藤京子（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター／基礎工学研究科助教）
WSコンテンツと連動させたWebコンテンツを開発。

「政策化実装グループ」
山口洋典（同志社大学大学院総合政策科学研究科）
実装化の為の地域との協力体制の構築や、ニーズ、地域の特色などを吸い上げ。
最終成果物「防犯演劇WS導入・企画開発パッケージ」の制作

3. 研究開発実施の具体的内容

3-1. 研究開発目標

〇防犯防犯演劇WSの開発

　座学による学習で「頭で理解する」のでは無く、「主体的に学習に参加し、頭と五感で体感する」ことができる、演劇WSの手法を用いて、防犯啓発劇を子どもたちが自ら作り、発表までを行う防犯演劇WSプログラムを開発する。

以下の5つの防犯演劇WSコンテンツを完成させる。
・対リアル犯罪単発コンテンツ「あんぜんパワーアップセミナー」
・対リアル犯罪単発コンテンツ「あんぜんパワーアップセミナー　ドラマティック版」
　…見送り（理由は後述）
・対リアル犯罪コンテンツ「暴犯団から身を守れ」（防犯標語『いかのおすし』を活かしたコンテンツ）
・対リアル犯罪コンテンツ「お地蔵さんを探せ！」（あんぜんパワーアップセミナーとの融合コンテンツ）
・サイバー犯罪　「暴犯団から身を守れ 2.0」
以上について、メタコンテンツ（台本）と、パッケージコンテンツ（サンプル台本）の形で、アウトプットする。

◇当初の目標
・リアル犯罪向けWSコンテンツの開発
　既に試作段階はクリアしている防犯演劇WSコンテンツ「連れ去り防止編」（主に低学年向け）の改良を行う。教育学者、現場の教員、教育委員会が「自治体レベルで実装が可能」と認めるクオリティを目指す。基本的に、WSは無形のものなので、どの様な形で、共有可能な形で保存するかが課題。WS開発専用の映像機器を備えたスタジオを整備し、映像でアーカイブしていく事を検討する。

・サイバー犯罪向けWSコンテンツの開発
　メディア犯罪防止編（主に高学年向け）の開発を行う。「リアル犯罪向けWSコンテンツ」と同等の完成度を目指す。

・WS社会実験の実施
　クラス単位でWSを行い、全校児童および保護者、地域に向けて発表会を行う。発表会後にはシンポジウムを行い、本プログラムの意義や成果を、広く共有するとともに、アンケート調査などによって、様々な主体のデータを集め、研究開発にオンタイムで反映させる。また、ウェブコンテンツ開発にも、広く意見を集約する。

◆変更点と理由
・WSは無形のものなので、どの様な形で、共有可能な形で保存するか、という課題に取り組んだが、成果物として可視化する必要があるという判断から、レジュメと台本という形を採用した。しかし、レジュメと台本が一人歩きする形では、演劇WSの効果が失われるばかりでなく、マイナスの影響を生み出しかねない（レジュメ、台本に沿ってやりさえすれば、うまくいく等）ので、その知見の有効活用とリスク管理について、引き続き取り組む必要を感じている。

・対リアル犯罪単発コンテンツ「あんぜんパワーアップセミナー　ドラマティック版」については、開発は終了しているが、社会実験の機会が期間中に持てなかった。
社会実験実施の協力校より、1日単発の安全パワーアップセミナーでは無く、防犯演劇WSを実施してほしい。という希望があり、対リアル犯罪コンテンツ「お地蔵さんを探せ！」（あんぜんパワーアップセミナーとの融合コンテンツ）を実施する事となった。
本プロジェクトでは、社会実験を中心に、研究会→コンテンツ開発→社会実験実施→コンテンツの見直し→コンテンツ完成となるため、「あんぜんパワーアップセミナー　ドラマティック版」のコンテンツ完成には至らなかった。今後の継続の中で、社会実験と実装に向けて努力していく。

〇防犯演劇WSの概念図の作成、効果測定、分析
　プロジェクトで測定すべき概念の検討を行い、子どもの防犯に関する「概念モデル」を作成、防犯演劇WSの効果を計るべく、質問紙法によるアンケート測定を行う。
…当初目標から、特に変更なし

〇WSを実践できる人材の育成
　それを指導できる防犯コミュニケーションティーチャー（以下、防犯CTと表記）の人材育成を行い、現場へ導入できる体制を整えた。

◇当初の目標
　・防犯CT育成プログラム
　CT育成のプログラムは、整備されているとは言いがたいが、東京で継続的に試みられている「ワークショップ研究会」の知見や、青山学院大-大阪大の共同プログラムである「ワークショップデザイナー育成プログラム」の知見を用いて、防犯教育への専門性をある程度持ったCTの育成プログラム開発を行う。
　WSコンテンツの開発プロセスを睨みながら、本研究開発プログラムで必要な質と量の防犯CT（東京と関西で10名ずつを目安）を、このプログラム内で育成し、実践に投入する事を目標とする。

○防犯演劇WSと連動したWebコンテンツの開発

防犯演劇WSと連動したWebコンテンツ（演劇WS支援用映像ツール、e-ラーニング教材、連絡ツールの3つのコンテンツ群）を開発、社会実験を行った。
連絡ツールには、既存のツール「facebook」を使って、「まもりーだー」を開発した。

◇当初の目標

・Web コンテンツ開発
WS コンテンツと連動（例えば、悪の首領は映像で出演、とすると、現場に派遣される防犯 CT は１名少なくて済む）した教材を開発する。CT との絡みを前提とするウェブ教材の開発は、ほとんど例を見ない試みなので、困難が予想されるが、演劇では映像を演出的に使用するノウハウも蓄積されているので、それらを応用する。

・WS と Web 連動型社会実験の実施
WS と Web それぞれのコンテンツが、教育現場での試用に耐え得る完成度を見たところで、まずは学校現場で、稼働の社会実験を行う。その際に行う公開のシンポジウムでは、ウェブコンテンツを家庭でも使用できるようにするというコンセプトを明らかにし、エンドユーザーからの意見を吸い上げるようにする。家庭での試用をしてくれるモニターを募集し、5〜10 件程度のリサーチデータの取得を目指す。また、研究開発期間中には、「学童保育」「地域コミュニティ」の現場でも、最低１回ずつの社会実験を行うことを目標にする。

◆変更点と理由

・Webコンテンツ開発については、プラットホームとして採用したfacebookが、期間中に仕様変更が行われるという不測の事態があり、社会実験での試用に堪え得るクオリティでの開発が、期間中には不可能となった。そのため、WSとWeb連動型社会実験は実施を見送った。

○防犯演劇WSスターターキット作成

本プロジェクトが開発した、WSプログラムを実施したいという現場（人材）が、具体的な施策に取り組めるだけの素材、知見、手法を提供する為の「防犯演劇WS導入・企画開発パッケージ」を作成し、関西を中心に、自治体へ政策化への提案をおこなう。

◇当初の目標

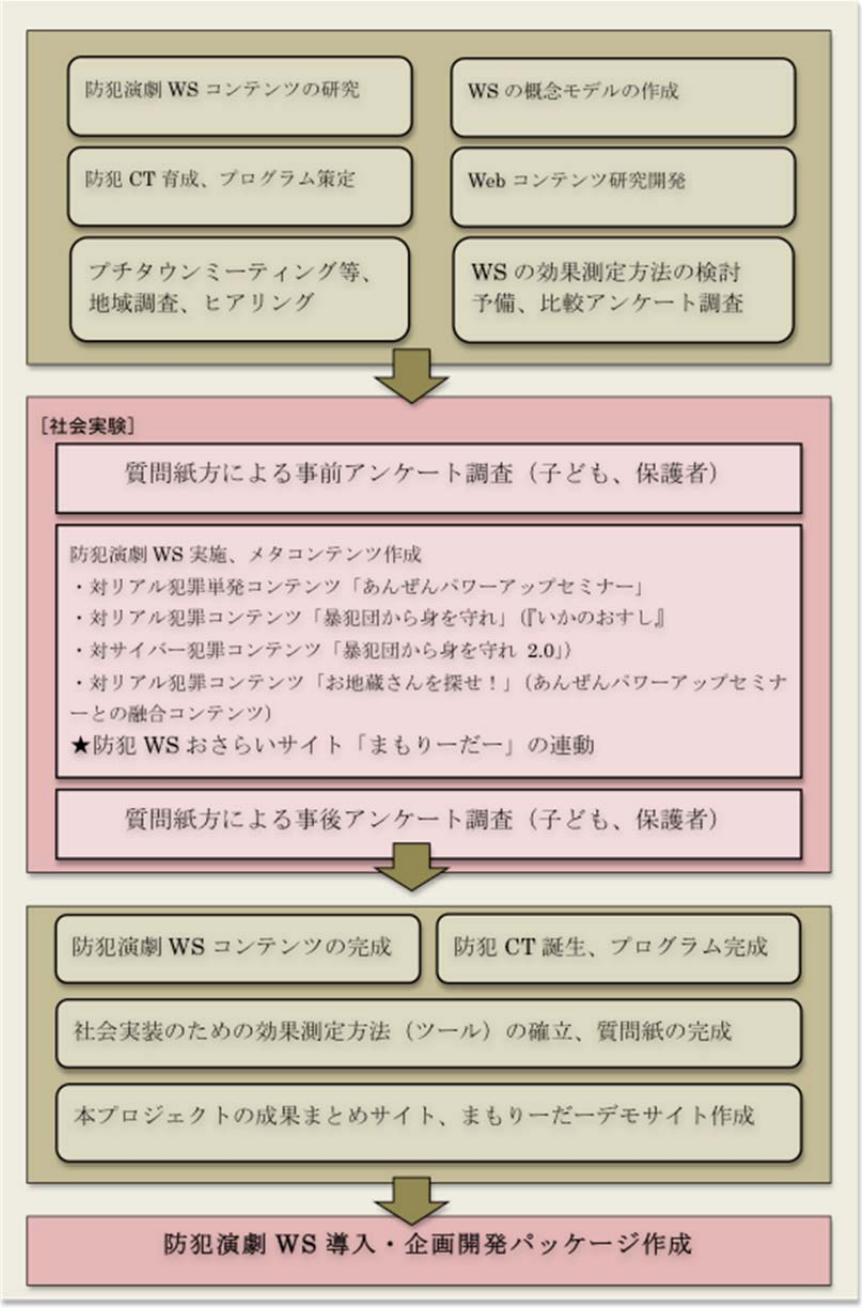
・政策提言の作成
本プログラムで開発されるコンテンツや方法論が、いかに高い公益性を持つか、そしていかに高いコストパフォーマンスを持つか、を検証・実証し、特に予算面の継続性をいかにして担保するかという視点で、政策提言を行う。
本事業は、宇治市、枚方市、京都市を最初のターゲットとし、地域性も加味した具体的提言を行う。また、民活の方策として、研究会参加企業のＣＳＲ活動や日本財団の「寄付」に関する知見を基に、寄付税制の改革にまで踏み込んだ内容を目指す。

◆変更点と理由

・市会議員との意見交換などの中で、条例や市の基本計画に組み込んでいくためには 5〜10 年のスパンで取り組む必要がある、また「子どもの防犯」という迫り領域の事を条例化する事自体が、そもそもマッチしないという指摘を受けた。そこで、「社会実装」及び「政策提言」という概念を捉え直し、5〜10 年度の条例化や基本計画への取り入れといった所まで視野に入れる形で、行政・民間・地域コミュニティといったセクターにこだわらない「実装」を想定することとなった。
本プロジェクトでは、あらゆるセクターの当事者が「まず、やってみる」ことが可能になるスターターキットを研究開発することとした。

3-2. 実施項目

◆プロジェクトの取り組みの流れ



防犯演劇 WS コンテンツ開発

以下の4つのパッケージコンテンツ、メタコンテンツ作成した。

・対リアル犯罪単発コンテンツ「あんぜんパワーアップセミナー」
・対リアル犯罪コンテンツ「暴犯団から身を守れ」(防犯標語『いかのおすし』を活かしたコンテンツ)
・対リアル犯罪コンテンツ「お地蔵さんを探せ！」(あんぜんパワーアップセミナーとの融合コンテンツ)
・サイバー犯罪　「暴犯団から身を守れ 2.0」

○対リアル犯罪コンテンツ「暴犯団から身を守れ」(防犯標語『いかのおすし』を活かしたコンテンツ)

21 年度、22 年度に開発した、防犯標語『いかのおすし』を活かした「つれさり」をテーマとする、防犯演劇 WS コンテンツ。
21 年度、立命館小学校
22 年度、岡山市吉備小学校学童保育／立命館小学校にて社会実験を実施した。
22 年度は、ウェブコンテンツとの連動に重点を置き、映像コンテンツを作成し、実際のワークショップで使用した。また、ソーシャルネットワークサービスサイト「facebook」を利用して、保護者への公開を行い、ワークショップの様子を Web を通じて参観してもらった。

○対リアル犯罪単発コンテンツ「あんぜんパワーアップセミナー」

22 年度～23 年度に開発した、1 日単発型の防犯 WS コンテンツ。
【安全のコツ】のなかから、
予防としての『よく見る』『よく聞く』、対処としての『にげる』『つたえる』
を、それぞれ身体をつかったゲームをとおして体験し、その大切さに気づくことができるプログラムである。
主に小学校低学年向けに実施が可能なプログラムとして開発。防犯 CT の育成においては、このコンテンツの習得と実践をゴールとして設定した。

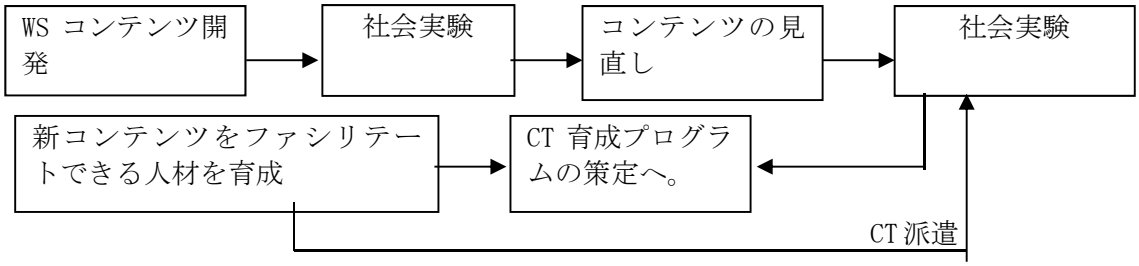
○サイバー犯罪　「暴犯団から身を守れ 2.0」

小学校高学年向けのサイバー犯罪対策演劇 WS コンテンツを開発、作成し社会実験を行った。
つれさり編「いかのおすし」をシリーズ化ととらえ、「くりのあかだし」という防犯標語を作成した。藤川大祐氏にメタコンテンツ監修を依頼した。

○対リアル犯罪コンテンツ「お地蔵さんを探せ！」(あんぜんパワーアップセミナーとの融合コンテンツ)

23年度に開発した、新たな防犯演劇WSコンテンツ。
関西チームで開発してきた「防犯演劇 WS」と関東チームが開発した「あんぜんパワーアップセミナー」のワークショップコンテンツをそれぞれ見直し、2 つのコンテンツを組み合わせた WS コンテンツを開発し、枚方市、京都市にて社会実験を行った。
「暴犯団から身を守れ」では、「悪い人」のアイコンをわかりやすくコミカルに表現したコンテンツに対し、「お地蔵さんを探せ！」では、「悪い人」が登場するのでは無く、
「ピンチってどんな時？」「知らない人に声をかけられたらどうする？」「なるべく独りにならないように。」をポイントとした。

(パッケージレベルのコンテンツ開発と実施の流れ)



防犯 CT 育成プログラムの策定

防犯 CT 認定のプログラム制定のための研究会を実施し、青山学院大学苅宿俊文教授に監修のもと、本プロジェクトで得たノウハウをプログラムとしてまとめた。
平行する防犯演劇 WS を参照しながら、育成プログラム開講に向けて整備していく。

○　防犯 CT による、防犯演劇 WS コンテンツ実施の定着と発展

平成 22 年度から進めてきた防犯 CT 育成のための「ワークショップ・ファシリテーター育成講座」最終年として、これまでの 2 年半の間に開発・実践を行ってきた「あんぜんパワーアップセミナー」等、演劇のもつシミュレーション効果をよりダイレクトに活用し、子どもたちが犯罪から自らを守るために必要不可欠な“予防（よく見る／よく聞く)”“対処（逃げる／伝える)”といった要素の具体的な体験と獲得を目指した WS プログラムを、防犯 CT が様々な教育現場や地域と連携して企画、実践し、その成果と課題を共有して振り返り、次回以降の現場にて活かしていく、というサイクルの確立と定着、発展に取り組んだ。

小学校・中学校・高校などの教育現場、学校や地域単位での PTA イベントなどで行われる防犯演劇ワークショップの現場に可能な限り多くの防犯 CT 候補者を登用し、当グループにて開発と社会実装が進んでいる複数の防犯演劇 WS プログラムの研修を実施する。

Web コンテンツ　連絡ツール開発

演劇 WS の支援ツールとなる、映像を制作し、映像を使用した演劇 WS コンテンツの研究開発、実施を行った。

○開発した映像支援コンテンツ

・ 講師によるデモストレーションの際に使用する、「暴犯団オープニング」映像
・ WS発表会にて使用する「暴犯団エンディング」映像
・防犯トレーニング映像「安全まもるくん」…武田信彦氏監修による、「身を守るコツ」をテーマにした、あんぜんパワーアップセミナー要素を含んだ、事前、事後学習用映像教材。

○facebookアプリ開発／立命館小学校保護者向けの説明書作成（別途添付）

演劇 WS と Web コンテンツを組み合わせることによる、「継続性」、「広域性」を備えたインフラ的プログラムを目指し、既存のサービス「facebook」による運用を行った。
自宅でのふりかえりや親子のコミュニケーションツールとして利用してもらう事を目的とした。子どもたちにも分かりやすく、シンプルなインターフェイスで、誰もが直感的に見たい情報にアクセスできるサイトを目指した。

演劇WSによる教育効果の「概念モデル」の作成

「先行研究の収集および研究者へのヒアリング」「アンケート調査からの意見分類／比較／構造化による概念整理」「コミュニケーションティーチャーへのヒアリング」「教員へのヒアリング」によって得られた知見を総合して、「防犯能力」に関連する項目について概念整理（定義）を行った。

「概念モデル」を元にした質問紙の作成

「概念モデル」を元にした質問紙（アンケート用紙）の作成を行った。効果検証を適切に行うためには、測りたい概念（それは抽象的なものであることが多い）を数量的に測定できるようにアンケートの質問文と選択肢を適切に設計しておく必要がある。特に今回は対象が小学校1年生の児童であることを踏まえ、質問文や選択肢を1年生でも理解できる文章であるかどうかに特に注意を払った。具体的には、書店で販売されている小学校1年生の国語のテスト問題での問題数やそこで使われている文章表現やイラスト表現を参考にするなどして、答えやすいかどうか、回答がある程度分散するかどうか（スケールや質問文のニュアンスが適切か)、測りたい概念を測ることができているかどうか等の視点で、㈱応用社会心理学研究所の研究員および心理学を専攻する研究者らが数回にわたって検討を繰り返した。（添付資料①-1，①-2）

防犯演劇 WS 効果検証

平成 23 年度枚方社会実験において、WS の事前と事後それぞれ、参加した子どもとその保護者に対して調査を実施し、回答結果に変化がみられるかどうかの予備調査、検証を行った。
また、改定された測定指標（質問紙）を用いて、平成２３年度末京都社会実験において、WS の事前と事後それぞれ、参加した子どもとその保護者に対して調査を実施し、回答結果に変化がみられるかどうかを確認した。

地域防犯・防犯演劇 WS 展開モデル作成

「犯罪からの子どもの安全」という具体的な政策理念に対し、演劇 WS を通じて、地域防犯コミュニティを形成するという政策課題に対し、研究フィールドからの政策的示唆についての認識を深め、他地域ならびに他主体による実践のための問題を探索した。
まずは、地域防犯の取り組みの中で、どのように防犯演劇 WS の展開していくのか？の展開モデルを作成した。

防犯演劇 WS の流れ（地域連携と効果フローチャート）

「防犯演劇ワークショップ」は、防犯に関する「特効薬」ではない。しかし、現代において、過去に起きた犯罪に学び、新たな犯罪を防ぐために、地域の多様な人々が「自分事」として他者に関心を向けていくきっかけづくりとして最適な手法の一つであると捉えている。
「防犯の日常化」をいかにつくりあげていくかがポイントになるのではないか。という観点で、フローチャートを作成した。

防犯演劇WS導入・企画開発パッケージ制作

「地域防犯について、何かやりたい・取り組みたい」という動機を持ち、ある程度コーディネータとしての資質も持っている、地域住民、保護者、PTA、教員の中の潜在的な「起爆と成りうる」人材が、具体的な施策に取り組めるだけの素材・知見・手法を提供できるスターターキット「防犯演劇 WS 導入・企画開発パッケージ」を制作した。

3-3. 研究開発結果・成果

21 年～22 年度　防犯 WS コンテンツ開発

○　防犯演劇 WS コンテンツ「暴犯団から身を守れ」（防犯標語『いかのおすし』を活かしたコンテンツ）

座学による学習で「頭で理解する」のでは無く、「主体的に学習に参加し、頭と五感で体感する」ことができる、演劇WSの手法を用いて、防犯啓発劇を子どもたちと講師が協力し作りあげ、発表までを行う防犯演劇WSプログラム。

21 年度、22 年度は、防犯標語『いかのおすし』を活かした「つれさり」をテーマとする、防犯演劇 WS コンテンツ、つれさり犯罪「暴犯団から身を守れ」を開発、
21 年度、立命館小学校小学１年生　4 クラス
22 年度、岡山市吉備小学校学童保育（ワークショップ参加者：15 名／発表会来場者　70 名）
立命館小学校小学１年生　4 クラスにて社会実験を実施した。

《WS の内容》

【オープニングのお芝居を観る】

講師によるデモンストレーション…はじめに、世界観の提示をする。この物語の中に入るんだ。という当事者性が生まれる事によって、自分事として、考えられるようになる。
また演劇の手本と見せることによって「求心力」集める。最終目標のお客さんの前で「発表する」ことをダイレクトに伝えることができる。

【コミュニケーションゲーム】

簡単な、コミュニケーションゲーム、自己紹介ゲームをして、緊張をほぐす。初めて会う講師とのコミュニケーションを円滑にしていく効果がある。

【全体ディスカッション「オープニングの続きをつくろう」】

話し合い、エチュード（即興劇）をしながら、物語をつくっていく。ただ机に座り、物語を考えるのでは無く、体を動かし、台詞を即興でつくっていくところに、プロの俳優との共同制作の醍醐味がある。お芝居をすること、発表会のハードルをさげる効果がある。

【完成した台本を繰り返し練習する】

発表会に向けて、練習を行う。グループで一つの目標にむかって、協力する「共同注意」の効果を生み出す事によって、チームの信頼関係を築く。

【発表会】

物語の世界を演じることによって、自分事として「防犯」を意識することが出来る。発表会でお客さんに観劇してもらうこと、多くの拍手をもらうことによって、成功体験を得ることが出来、防犯に対してマイナスのイメージでは無く、前向きな活動として捉えてもらう。

○あんぜんパワーアップセミナー

『あんぜんパワーアップセミナー』は、【安全のコツ】のなかから、予防としての『よく見る』『よく聞く』、対処としての『にげる』『つたえる』を、それぞれ身体をつかったゲームをとおして体験し、その大切さに気づくことができるプログラムである。主に小学校低学年向けに実施が可能なプログラムとして開発。防犯ＣＴの育成においては、このコンテンツの習得と実践をゴールとして設定した。

このプログラムの特徴は、単独での実施だけでなく、一部を抜粋して防犯をテーマとした演劇創作型 WS にも活用することができることである。単独での実施では、小学校の２校時分（９０分）で効率よく実施が可能でありながら、「自分で自分の身を守る」ことの大切さを最大限の効果で体験的に学ぶことができる。一方防犯演劇 WS の冒頭に、ウォーミングアップやアイスブレイクとしてこれらのゲームを活用することで、参加者たちがリラックスして肯定的に創造的活動に臨む準備を整えるばかりでなく、演劇創作のテーマとなる「防犯上の態度」を体験的に知る効果をもたらしている。

《会場づくり》
学校の体育館等の施設において、備品をつかって間仕切りや空間づくりを行い、4 つのゲームエリアを設定する。

《4 つのゲーム》
参加者は、冒頭全体でのウォーミングアップ（あいさつ、仲間わけゲーム他の導入のゲームなど）を経て、4 つのグループにわかれてゲームに参加。それぞれのエリアには安全・防犯の知識を有した専門のファシリテーターがおり、ルール説明の後 15 分間のゲームを実施する。

ゲームは以下の４つとなっている。

【よく見る】ゲームエリア　しっかり確認！ハンカチおとしゲーム
【よく聞く】ゲームエリア　気になる音ってどんな音？音さがしゲーム
【にげる】ゲームエリア　新聞棒で距離のトレーニング、ちょっとかわった鬼ごっこ
【つたえる】ゲームエリア　みんなで伝えよう！ジェスチャーゲーム

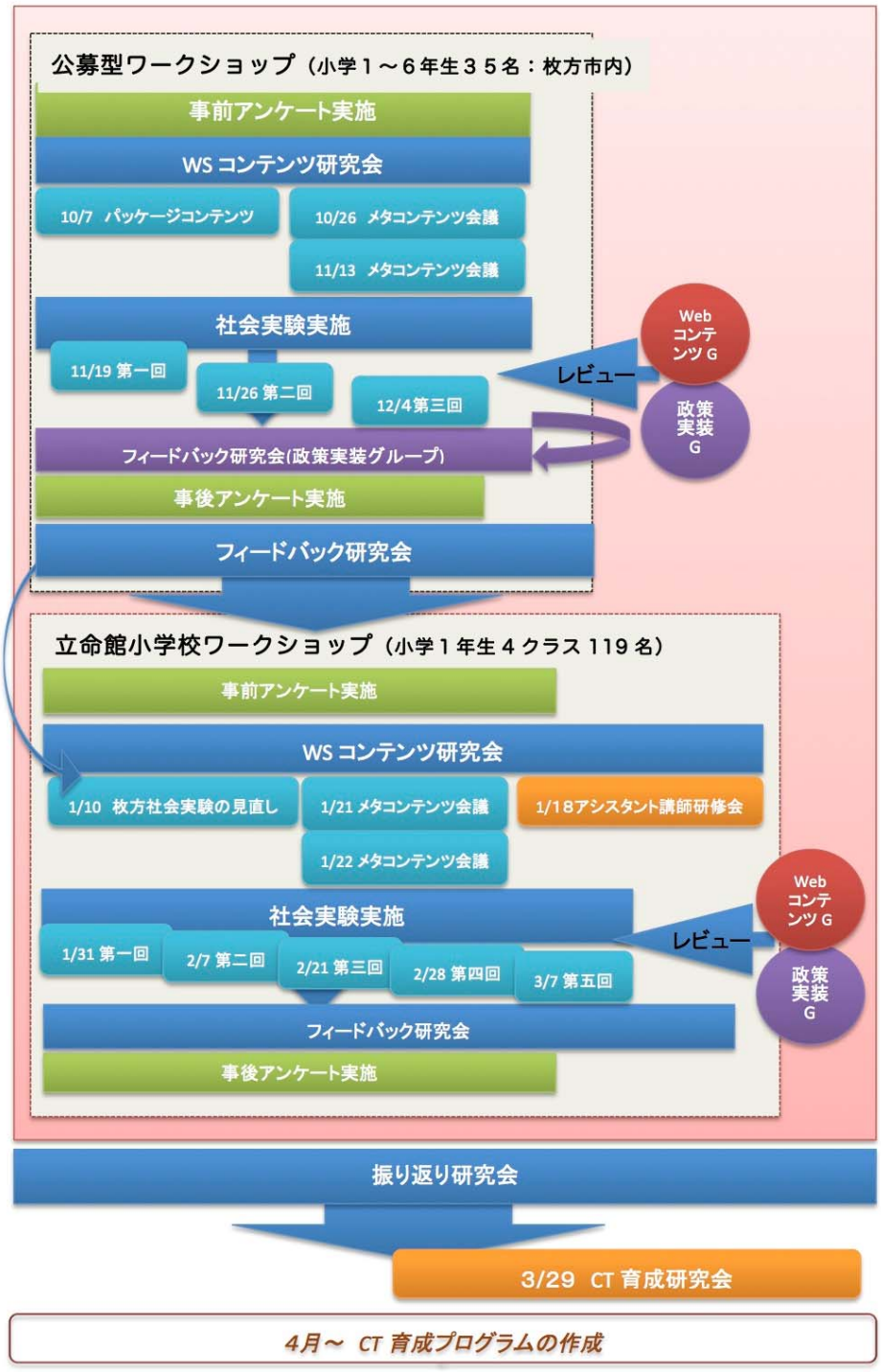
一つのゲームが終了すると、次のゲームエリアに移動。最終的にすべての参加者が４つのゲームを行い、その体験から安全の４つの要素を学ぶ。

単独実施のプログラムの場合、各エリアでゲームが終わった後、感じたことを参加者同士で共有する時間を設定する。そこでは『安全に役立つコツがはいったゲーム…』とだけ紹介し、参加者に「いまのゲームに含まれている安全のコツは何だったでしょうか？」と質問を投げかける。たくさんの答えが出て、子どもたちは自分が発見したことを他の参加者と共有。ゲームファシリテーターである防犯 CT は、その場ではあえて“正解”を言わず、「4 つのゲームが終わるまで考えておいてくださいね」と声をかけ、参加者たちを次のゲームへと誘う。すべてのゲームが終了した後、全体で集合し、安全インストラクターが各ゲームをふりかえりながら、それぞれのゲームに含まれている安全のコツについてきちんと説明し、全体のプログラムが終了となる。

『あんぜんパワーアップセミナー』は、平成 22 年度に、第 4 回キッズデザイン賞 2010　フューチャーアクション部門優秀賞を受賞した。WS コンテンツがこのような形で社会に認知されることじたいが極めて異例であり、『あんぜんパワーアップセミナー』が高い防犯上の効果と、演劇的な創造性が担保されたコンテンツであることを証明しているものと考えている。

23 年度　コンテンツ開発と連動したプロジェクトの流れ

23年　8月～9月　パッケージコンテンツの枠組み調整
日程／場所／参加者数等／CT選出等、パッケージコンテンツの大枠にあたる部分の調整。
10 月…パッケージコンテンツ／メタコンテンツ作成
11 月～12 月　つれさり編「お地蔵さんを探せ！」社会実験①
・事前アンケート実施（対象：参加者 35 名＋保護者）
・Web コンテンツ「まもりーだー」のモニター実験
・フィードバック研究会／事後アンケート
1 月　つれさり編「お地蔵さんを探せ！」社会実験①の反省を元に、コンテンツ改良
2 月～3 月　つれさり編「お地蔵さんを探せ！」社会実験②
・ 事前アンケート実施（対象児童120名＋保護者）
・ Webコンテンツ「まもりーだー」のモニター実験
・ フィードバック研究会／事後アンケート
・CT の集い…CT の振り返り／CT 研修



23 年度　防犯 WS コンテンツ開発

○　防犯演劇 WS コンテンツ

サイバー犯罪　「暴犯団から身を守れ 2.0」

小学校高学年向けのサイバー犯罪対策演劇 WS コンテンツを開発、作成し社会実験を行った。つれさり編「いかのおすし」をシリーズ化ととらえ、「くりのあかだし」という防犯標語を作成した。藤川大祐氏にメタコンテンツ監修を依頼した。

※メタコンテンツ（シナリオ）は、別途添付。（添付書類②-2）

○リアル犯罪コンテンツ「お地蔵さんを探せ！」(あんぜんパワーアップセミナーとの融合コンテンツ)

23年度に開発した、新たな防犯演劇WSコンテンツ。
関西チームで開発してきた「防犯演劇 WS」と関東チームが開発した「安全パワーアップセミナー」のワークショップコンテンツをそれぞれ見直し、２つのコンテンツを組み合わせた WS コンテンツを開発し、枚方市、京都市にて社会実験を行った。
「暴犯団から身を守れ」では、「悪い人」のアイコンをわかりやすくコミカルに表現したコンテンツに対し、「お地蔵さんを探せ！」では、「悪い人」が登場するのでは無く、
「ピンチってどんな時？」「知らない人に声をかけられたらどうする？」「なるべく独りにならないように。」をポイントとした。
※メタコンテンツ（シナリオ）は、別途添付。(添付書類②-3)

「お地蔵さんを探せ！」他、今後のさまざまなテーマに合わせて実施できるよう、社会実装する際のタイトルとして「演劇で防犯」～子ども防犯演劇ワークショップ～　に名称を改めた。

「防犯演劇 WS 導入・企画開発パッケージに収録されているフライヤー」

〇防犯演劇 WS コンテンツのパッケージ化
23 年度に開発した、防犯演劇 WS を【公募型】【学校型】として、パッケージ化に取り組んだ。

《公募型》
参加者：15 名～30 名程度
講師数：2 名／サポート 2 名
ワークショップ回数：3 回～4 回

＜1 回目＞ 時間：3～4 時間	実施内容） ①事前アンケート実施 ②講師によるデモンストレーション ③コミュニケーションゲーム（あんぜんパワーアップ要素） 三角あるき／新聞棒おにごっこ／ジェスチャーゲーム ④全体ディスカッション　「ピンチってなーに？」 ⑤グループ（学年別）ディスカッション（配役、テーマ等） ねらい）**オープニング上演**…演劇の手本と見せることによって「求心力」集める。また、最終目標「発表する」をダイレクトに伝えることができる。 **アイスブレイク**…参加者の緊張をほぐしながら、安全パワーアップに必要な「よく見る」「よく聞く」「逃げる」「伝える」要素を取り入れたゲームを展開。共同作業の創り上げることを意識してもらう。また講師と生徒とのコミュニケーション促進のため
＜2 回目＞ 時間：3～4 時間	実施内容） ①コミュニケーションゲーム／発声練習 ②台本をもとにグループ別練習 ③練習をしながらセリフをつくる。 ねらい）参加者の発言や体験を台本に取り入れることによって、普段の生活に近い、リアルな体験（演劇）を感じてもらえるのではと思う。また、発言を取り入れることによって台本づくりに主体的に参加してもらう。チームのオリジナル性を高め、練習へと興味をつなげる。
参加者の宿題	台本を覚える／小道具、衣装の準備
〈3 回目〉 時間：3～4 時間	実施内容） ①コミュニケーションゲーム ②チーム別練習 ③リハーサル ④本番 ⑤振り返り ⑥事後アンケート 終了

《学校型》
対象者：小学生
講師数：1 クラス 2 名
ワークショップ回数：3 回～5 回（学校の要望とすり合わせる。）

＜1 回目＞ 2 コマ（90 分）	実施内容） ①事前アンケート ②講師によるデモンストレーション ③コミュニケーションゲーム（あんぜんパワーアップ要素） 新聞棒おにごっこ／ジェスチャーゲーム ④全体ディスカッション 「ピンチ」「マナー」「距離をとる／逃げる／伝える」 ⑤体を動かしてシーンをつくる。
＜2 回目＞ 2 コマ（90 分）	実施内容） ①コミュニケーションゲーム ②発声練習 ③台本づくりのディスカッション…先週のつづき ④シーンづくり→ある程度配役、グループ分けてシーンをつくる。 ※まもりーだーの案内をする。
〈3 回目〉 2 コマ（90 分）	実施内容） ①コミュニケーションゲーム ②発声練習 ③台本をもとに練習 ※台本の配布タイミングは各クラスの講師の判断
子どもの宿題	セリフを覚えてくる。 自分の配役の衣装、小道具を考えてくる。
〈4 回目〉 2 コマ（90 分）	実施内容） ①お芝居づくり ②2 クラスで、ミニ発表会☆ ③クラスに戻って練習 ☆ねらい） 途中段階の成果を発表することにより、他のクラスの進捗や、お友達の頑張っている姿をみて刺激をうける。 発表会までの自分の課題をみつける。
〈5 回目〉 2 コマ（90 分）	実施内容） ①クラスでの最終通し稽古 ②会場（アクトシアター）に移動→発表会 ③クラスに戻って振り返り ④事後アンケート

防犯 CT 育成、防犯 CT 育成プログラム策定

○防犯演劇 WS コンテンツの活用、および社会実装モデルの検証

2 年半の間で実施した防犯 CT の育成のノウハウをプログラムとしてまとめ、防犯 CT の認定までに総時間数 120 時間を要する人材養成プログラムを策定した。最終年度となる平成 24 年度には，防犯 CT 認定のプログラム制定のための研究会を実施。苅宿俊文氏（青山学院大学社会情報学部教授）を第三者の有識者として招き、実施している防犯演劇 WS を参照としながら、平成 23 年度までに得られた知見をまとめる形で研究会を進めた。

プログラムを遂行する機関と、CT のスキルを資格認定するための機関の峻別、座学及び実地研修等における講師イメージ、e-learning の活用、SNS を利用した共有・検証方法の検討なども行うとともに、実施する機関がよりフレキシブルに活用できるよう、対象者の経験によって短縮し

ての実施が可能かどうかの検証を行った。
（別途添付　表「防犯 CT 育成プログラム実施の流れ」）

防犯CT育成プログラム　実施の流れ

講座A群 座学講座が中心 1回5時間×5日間　計＝25時間	ワークショップ基礎論	・ワークショップとは何か／ファシリテーターの役割／オリジナルプログラムを作る意味／コーディネーターの資質を獲得すること／自分の「型」から他分野との出会いへ
	WSの社会性や アウトリーチの意義を考える	・社会に参画するための言語づくり、演劇外の人たちと繋がるための説明責任／なぜ演劇やアート系のワークショップが、現在世の中に必要なのか。
	アーティストの創作表現と オリジナルWS	・アーティストが作る作品世界と、ワークショップは表現は異なるが同一等価である。
	他分野とのコラボレーション 演劇から社会テーマへ	・様々な価値観を持つ人たちとのイメージをすりあわせをする作業→演劇と他分野、社会テーマとのコラボレーションによって生まれる新しい価値。
	教育現場におけるWS導入／ 共通言語を獲得するために	・学校教育現場に導入するために必要な言語の獲得／企画書の作成→説明責任 ・人と人が繋がる回路についてのプロフェッショナルとして／コミュニティのイメージ
講座B群 ファシリテーション実践演習： 1回4時間×5日間　計20時間 プログラム作成：個人/グループ作業 および代行マスターとのMT、 代行WS、振り返り、 自己分析、ねらいと目的の作成 計30時間（目安）	ファシリテーション実践演習	・ワークショップの導入として利用される様々なシアターゲームを検証・アレンジし、実際に進行してみる。進行すること以外に、ファシリテーターが心がけるべき点（補助者との関係、会場等実施環境への配慮、観察すべきポイント等）を洗い出し、意識づけをする。 ・既に現場で活躍されている様々なジャンルの講師を招き、ワークショップを受講する。プログラムの検証以上に、ファシリテーションの観点で振り返りを行い、多くの気づきを共有する。
	オリジナルプログラム作成	・個人／グループに分かれ、オリジナルのワークショップ・プログラムを考える。 ・作成したプログラムを「代行マスター」が研究会メンバー対象にファシリテーション。作成者／グループは参加せず、はたからその様子を観察し、プログラムの課題、参加者の様子、ファシリテーションのポイント細かくチェックする。 ・代行マスターによるワークショップの分析を行い、プログラムの狙いと目的を作成。またワークショップの効果、課題、ファシリテーションのポイントなどを言語化する。
中間成果発表　計＝3時間	オリジナルワークショップ実施	一般参加者対象のワークショップを実施。2時間のワークショップと1時間の振り返り。
講座C群 （防犯／安全項目） 座学研修：計30時間 ファシリテーション研修： 各コンテンツ　1回3時間×4日間 計＝12時間 現場研修： 補助者として＝3現場以上 ゲームファシリテーターとして＝3現場以上	座学研修	・防犯の基礎的な知識（民間ができること、パトロールの現状、子どもの安全、観察力、4つの安全要素、コミュニケーションで切り抜けられること）等の知識を獲得。 ・具体的に町を歩き、身を守るために設置させているものなどを体感する。 ・「あんぜんパワーアップセミナー」「かっこよく逃げるワザ～さわやか護身術～」のプログラム研修　等
	ファシリテーション研修	・あんぜんパワーアップセミナーの4つのゲームを理解し、ファシリテーションができるようになる。 ・攻撃を加えない「かっこよく逃げる」護身術のコツを習得し、シュミレーション発表のやり方を学ぶ。
	現場研修	・あんぜんパワーアップセミナーでのゲームファシリテーション、「かっこよく逃げるワザ」でのサポート、その他防犯演劇WSの現場に参加し、実地経験を得る。

受講者は「演劇を含むワークショップ実施の素養がある人」「地域の防犯活動に従事している人」「教育関係者」等と想定している。また、実施期間は１年間とする。

防犯 CT には演劇 WS の効果を活用した WS のプログラムと環境づくりが求められるため、「演劇 WS」を理解し実践することができるようになることが必須となる。そのため、演劇 WS についての座学講義や実践演習の割合が高くなっている。

【講座Ａ群】では、「参加体験型学習＝ワークショップ」そのものの意味付けと意義の理解、CT に不可欠な社会性の認識を獲得することなどを中心に、座学と WS 体験による 5 時間×5 日間、計 25 時間の講座を実施する。期間は 3 か月間。基本的にすべて対面式の講座だが、それぞれの段階での復習課題や理解度確認のために、e ラーニングによる学習の導入も行う。

【講座Ｂ群】では、WS の進行（＝ファシリテーション）を体験する「ファシリテーション実践演習」と、演劇の要素を活用したＷＳプログラムを他者と協働しながら作っていく経験の獲得を狙った「オリジナルプログラム作成」を平行して実施する。「ファシリテーション実践演習」は 4 時間×5 日間の計 20 時間。「オリジナルプログラム作成」は実施日数に関わらず合計 30 時間を目安として行う。期間は 4 ヶ月間。
また、【講座Ｂ群】における【中間成果発表】の機会を設け、作成したオリジナルプログラムを自分たちで進行し、一般参加者を対象として実施する。それぞれのプログラムを２時間と定め、その後公開での振り返りを１時間行うこととする。

【講座Ｃ群】は、防犯に関する専門性を身に付け、演劇を活用した防犯 WS の実施ができる防犯

CT の素養を満たすことを目的としている。
「座学講座」は、安全インストラクターによる基礎的な防犯知識の獲得を目的とした講座、子どもたちの安全を守るための要素を再発見する町歩き、既に様々な地域で実施されている防犯演劇 WS を見学・受講等が含まれている。計 30 時間。
「ファシリテーション研修」は、『あんぜんパワーアップセミナー』で実施する 4 つのゲームを理解し進行ができるようになること、またそれらの要素を用いた演劇創作での進行・補助作業ができるようになることを目的として行われる。計１２時間の研修となる。
「現場研修」は、防犯演劇 WS の補助者、あるいは『あんぜんパワーアップセミナー』においてゲームを進行するファシリテーターとして、実際に現場経験を積んでもらうことを目的としている。目安として、5～6 現場以上に参加し、それぞれの立場で求められている役割を認識・遂行することができるかどうかを、防犯 CT の認定検証の材料とする。

【防犯 CT の認定】は、防犯 CT プログラムを実施する機関の推挙と、認定のための機関が実施する最終試験の結果によって行われる。プログラム実施機関は、講座群ごとに提出を義務付けるレポートや現場研修の様子等、参加者の適性を鑑みて推挙を行うかどうかを決定する。

21年～22年度映像支援ツール／Webコンテンツ制作

○防犯演劇WSと連動したWebコンテンツの開発
防犯演劇WSと連動したWebコンテンツ（演劇WS支援用映像ツール、e-ラーニング教材、連絡ツールの3つのコンテンツ群）を開発、社会実験を行った。

演劇WSとWebコンテンツを組み合わせることによる、「継続性」、「広域性」を備えたインフラ的プログラムを目指し、22年度は、既存のサービスによる試験運用を行った。

○映像支援コンテンツ
演劇ワークショップの支援ツールとなる、映像を制作し、映像を使用した演劇ワークショップコンテンツの研究開発、実施を行った。

１）講師によるデモストレーションの際に使用する、「暴犯団オープニング／エンディング」映像
学校現場等での使用については、映像と生で出演する俳優が絡んで物語が進行するような内容になり、コストの軽減に資することになる。

２）安全パワーアップ！「安全まもるくん」
武田信彦氏監修による、「身を守るコツ」をテーマにした、映像教材を作成。
「身を守るこつ」の防犯指導を、映像コンテンツとして制作。学校現場の指導や家庭学習が行える上に、家庭で学校における取り組みを理解する手助けにもなる。

○facebookアプリ開発

ワークショップでの学びを経験として長い時間定着させる為には、「事前学習」と「振り返り」が重要であると考え、ワークショップ前・後の学習を支えるツールとして、Facebook という認知度の高い既存のツールを使ってアプリを開発した。

小学校で行われるワークショップの様子を、動画カメラにて 30 秒～2 分程度のスナップ映像を撮影しソーシャルネットワークサービスサイト「facebook」にアップ。
自宅でのふりかえりや親子のコミュニケーションツールとして利用してもらう事を目的とし、保護者限定で公開した。

23 年度　Web コンテンツ　連絡ツール開発＆仮完成

22 年度に引き続き、Facebook を使って、ワークショップ前・後の学習を支えるツールとして『まもりーだーon facebook』を開発した。
子どもたちにも分かりやすく、シンプルなインターフェイスで、誰もが直感的に見たい情報にアクセスできるサイトを目指した。

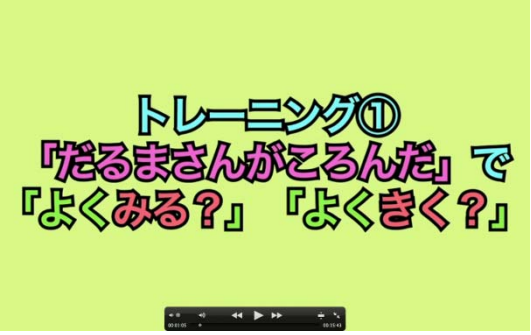
e-ラーニングモニター実験／連絡ツールモニター実験

facebook を活用した、連絡ツール「まもりーだー」は、枚方市の公募型、京都市内市立小学校で仮運用した。枚方市の公募型では 20 アクセス、小学校では 1 学年約 120 名のうち、55 アクセスがカウントされた。インターネットを使った連絡ツールは、公立の小学校などでも連絡網等として活用されているが、運用のされ方やシステムが千差万別で、新しいツールを入れこむことも、既存のツールと連用させることも、非常に困難であることがわかった。

保護者用の「まもりーだー」レジュメ」

○事前学習「安全まもるくん」（映像時間：16 分）

あんぜんパワーアップセミナーの要素「よく見る、よく聞く、逃げる、伝える」の「身を守るこつ」を予習していただくことが出来る、e-ラーニングコンテンツ「安全まもるくん」の映像が見られる。



24 年度まとめサイト作成

Web コンテンツチームがメインとなり、本プロジェクトの成果をまとめた、まとめサイト作成した。プロジェクトの概要、開発したコンテンツのアーカイブ、ふり返りサイト「まもりーだー」デモサイトもみられる。

http://www.fringe-tp.net/bouhanweb

プログラム評価の方針検討（21年度）

○演劇WSのコンテンツ資料のレビューおよび評価方法の方針検討

21年度（初年度）は防犯演劇WSの効果測定を検討するにあたり、これまでに実施された演劇WSコンテンツの映像資料、報告書、およびe-ラーニングコンテンツ「環境劇をつくろう！」のレビューを行い、演劇WSの手法および基本的な情報の理解・共有を行った。

また、科学警察研究所の有識者へのヒアリングおよび、協働する㈱応用社会心理学研究所のアドバイスを受け、測定指標や測定方法の検討が不十分な状態でWSの効果検証作業を性急に進めるよりも、まずはプログラム評価方法について先行知見を十分に収集し計画作り（概念の整理や因果関係についての仮説作りおよび測定指標の開発など）を行うことが先決であると考えるに至った。

防犯演劇WSの効果測定を検討するにあたり、取り組む必要がある中心的な問題は次の2点であった。

1つは「アウトカム」をどのようなものに設定するかという問題であった。防犯演劇WSの教育的効果を実証するためには、WSを実施した前後で子どもの「防犯能力」が向上していることを示さなければならない。しかし、そのためには「防犯能力」とは何かを定義し、「防犯能力」に関連する項目について概念整理をしておくことが必須となる。そして、それらの概念のうちどの項目を「アウトカム指標」として測定するのかについて、プログラムコンテンツの内容と調整しながら設定する必要があった。

2つめは上記で設定した「アウトカム」を数量的な指標としていかに測定可能するか、どのような調査デザインを設計するかという問題である。周知の通り、プログラム効果検証にはシミュレーション実験、ロールプレイング、ビデオ観察、質問紙法などの方法があり、目的に応じて利用される。例えば「行動面」を測定する場合にはシミュレーション実験、ロールプレイング、観察法などを利用することが有効である。一方で「認知」や「態度」を測定する場合には質問紙法が有効となる。今回のプログラムで問題となるのは、主要な対象者が小学1年生の児童であり、WSは主に公教育の授業の一環として行われるということである。これらの条件は効果測定にとっては制約になる可能性が高いと思われた。具体的には、シミュレーションなどの実験的方法は実際に恐怖感情を子供に体験させることにつながり易いために倫理面で問題があること、質問紙法は小学校1年生の文章理解力の問題で利用することが難しいこと、また、量的な心理スケールを使用できないこと、さらには、WS実施群と非実施群を比較するために対照グループを設定することは倫理的に問題があることなどである。

22年度は、上記にまとめた2つの問題設定を中心に「防犯能力」についての概念整理をするとともに、「防犯能力」の測定指標の作成について検討を行う方針とした。

○平成21年度京都社会実験において、効果測定の検討材料や意見の収集のためのアンケートを実施

上記の考え方のもと、平成21年度（プログラム初年度）の京都社会実験時では効果測定の計画検討の材料となるように、WS参加者の保護者および担任の先生に対して自由記述式アンケートによる意見収集を行った。

質問項目

- 子どもを犯罪から守るために困っていること、必要だと感じていること
- 「演劇WS」に期待する効果や変化
- 「演劇WS」期間での「演劇WS」「犯罪からの子どもの安全」についての子どもとの会話
- 「演劇WS」による子どもの意識や行動の変化
- 「演劇WS」による保護者自身の意識や行動の変化

結果のとりまとめについては「自由記述アンケート調査からの意見分類／比較／構造化による概念整理」の項目を参照のこと。

「防犯能力」に関する概念の整理および「概念モデル」案の作成（22年度）

21年度に検討したプログラム評価の方針をもとに、以下3つの項目で得た知見から「概念モデル（初版）」を作成するとともに、測定可能な概念のうち測定するべき項目の選定を行った。

・先行研究の収集および研究者へのヒアリング
・21年度実施の自由記述アンケート調査からの意見分類／比較／構造化による概念整理
・コミュニケーションティーチャーへのヒアリング

○先行研究の収集および研究者へのヒアリング

「防犯行動・能力」「子どもの犯罪被害」等について先行知見の確認を行った。具体的には，「防犯」「教育」「効果測定」「能力」「子ども」などをキーワードとして，国立情報学研究所の「GeNii」による文献検索および，Google等の一般に利用できる検索エンジンによる文献検索を行なった。

また、先行する研究開発プロジェクトの「犯罪からの子どもの安全を目指したe-learningシステムの開発」の評価チームである、大阪教育大学の藤田大輔氏および、兵庫教育大学の西岡伸紀氏らに、「防犯能力」概念や子どもに対する「防犯能力の測定」に関する研究成果についてヒアリングを実施した。

その結果明らかになった主な内容を以下に示す。

●子どもの犯罪被害についてのサーベイや，子どもの防犯教育に関するプログラム開発の事例は見られるものの，プログラム評価研究の事例が少ないということ。

●「防犯能力」に関する研究は少なく，概念を体系的に整理した研究は未だ少ないこと。「犯罪からの子どもの安全を目指したe-learningシステムの開発」の評価チームがまとめた「安全能力」の考え方をもとにした「防犯能力」の構造が現状では最もよく整理されているようであること。

●子どもの防犯能力の評価手法としては，「シミュレーション場面での行動観察」「グループインタビューや個別の面接」「ロールプレイングによる行動観察」「質問法による意識や態度の測定」などが認められること。

●シミュレーションによる方法は，評価手法としての妥当性は高いものの，教育現場における実行可能性には問題があると考えられているということ。また，ロールプレイングによる方法も代表性の問題，作為性を子供にわかってしまうという問題，行動とインタビューでの発言には相関性が低いという問題などがあるということ。

●ロールプレイングは，スモールな場面設定をすることで「対処能力」について測ることができるかもしれないこと。

●質問紙によって，小学生のプログラム評価を行なっている事例はそれほど多くないこと。

●小学生の低学年（3年生以下）にアンケートで自己評価させるのは難しいこと。アンケートで「行動」面を測定することは難しいこと。

※なお，上記の内容を確認する際，特に参照した文献を以下に提示する。

・藤井真美，他　安全能力の概念と構造，安全教育学研究，7，3-16，2007

・藤田大輔，他　「防犯能力の測定指標の開発グループ」平成19年度～21年度研究報告書　防犯能力の測定指標の開発，2010

・西岡伸紀，他　小学生の防犯能力の測定，評価に関する予備的研究～誘拐防止を中心とした先行研究の分析～，日本セーフティプロモーション学会誌，2（1），71-75，2009

・内田伸子，幼児の安全教育に関する総合的研究ー幼児の危険認識の発達に及ぼす社会・文化的要因の影響ー，（財）セコム科学技術振興財団研究助成平成19年度研究成果報告書，2008

・ローレンス・W・シャーマン，他編、津冨宏・小林寿一監訳，エビデンスに基づく犯罪予防，社会安全研究財団，2008

○自由記述アンケート調査からの意見分類／比較／構造化による概念整理

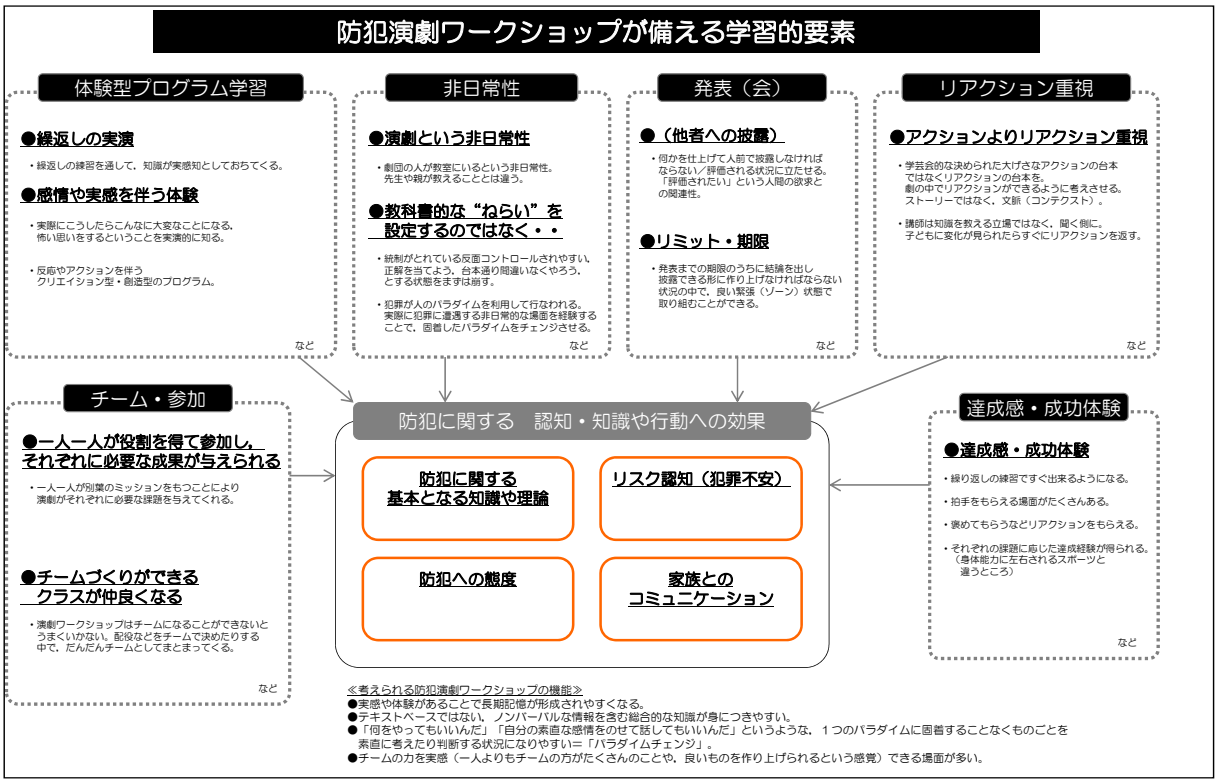
平成21年度の京都社会実験時に収集した保護者に対するアンケートの自由意見データを使用し「防犯」に関する概念の抽出と構造化を、㈱応用社会心理学研究所の研究員および心理学を専攻する研究者、大学院生らでKJ法等を用いて行った。

table1 防犯能力概念についてのＫＪ法によるカテゴリー整理

子どもに関するカテゴリー	親に関するカテゴリー
ソーシャルスキル	**家庭での防犯への取り組み**
・対面的な場面での振舞いや応対	・防犯に関する実践をする
・他者との相互協働	・防犯についての会話をする
自己 個人内過程	・具体的な場面を設定して話したり，シュミレーションする
・自己肯定感	**教育意識**
・自己効力感	・家庭で防犯に関して教える必要性意識
「肯定的社会」観	**演劇や体験の重要性**
・社会への関与	・演劇や体験の重要性
・社会（大人）への安心感・信頼感	**親の防犯に関する知識**
防犯に関する知識	・安全な場所の知識
・安全な場所の知識	・具体的対処行動の知識
・具体的対処行動の知識	**親のリスク認知**
リスク認知	・犯罪不安
・犯罪不安	・危険不安
・危険不安	**コミュニティー意識**
防犯への態度	・地域への関心
・防犯のための態度	・地域での防犯意識
状況判断力	**地域での防犯活動への参加**
・状況判断力	・声かけや地域の子どもに注意を向ける
予防行動をとる	**演劇ＷＳプログラムについての評価**
・予防行動をとる	・評価
犯罪対処行動をとる	・効果への期待
・犯罪対処行動をとる	・感想
家族とのコミュニケーション	
・家庭で，学校であったことを話す	
・家庭で危険なことを共有する	
演劇自体への興味	
・演劇自体への興味	

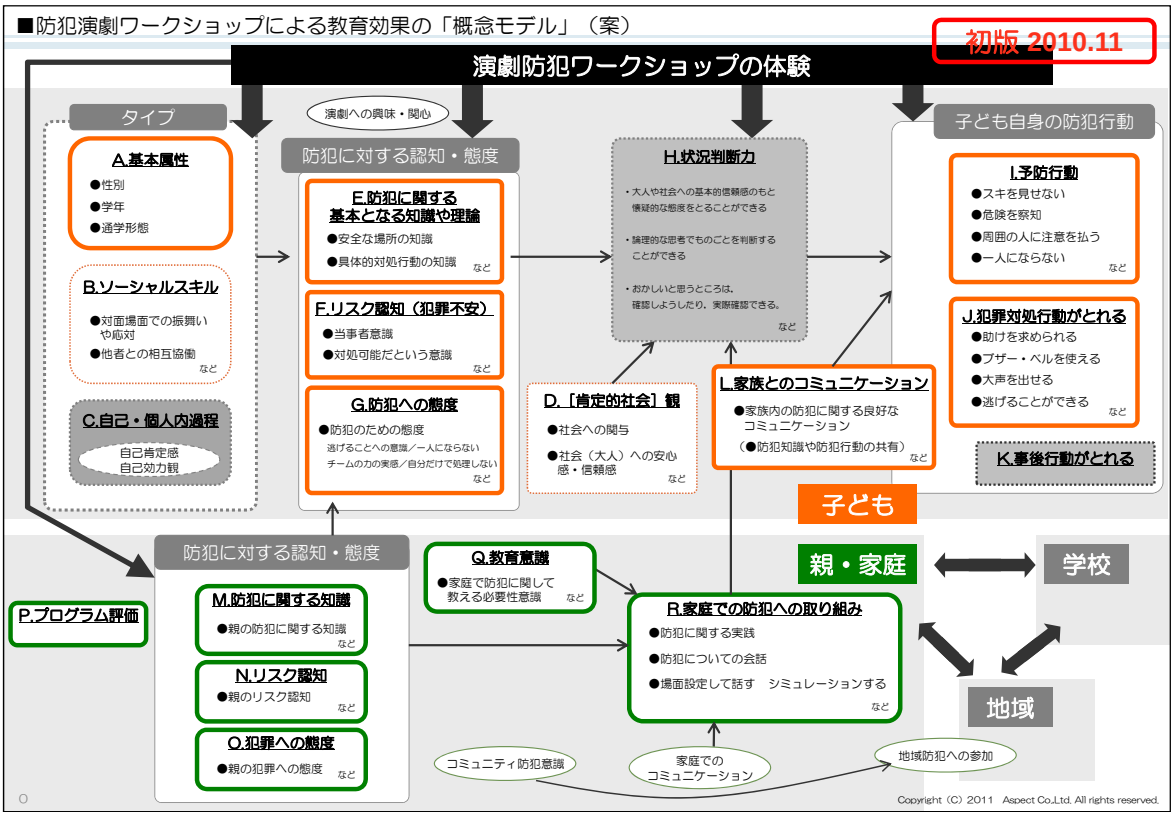
○コミュニケーションティーチャーへのヒアリング

「先行研究の収集および研究者へのヒアリング」「21年度実施の自由記述アンケート調査からの意見分類／比較／構造化による概念整理」の知見をもとに作成した「概念モデル（案）」が現場のコミュニケーションティーチャーの実感にズレがないかどうか、現場のコミュニケーションティーチャーに内在されている演劇WSによる効果が表れるプロセスを探る目的で、半構造化されたグループインタビューを実施。㈱応用社会心理学研究所の研究員および心理学を専攻する研究者らによって、ヒアリング内容をベースにしたテキストデータの分類・整理が行われた。とりまとめ結果を以下に示す。



○演劇WSによる教育効果の「概念モデル」（案）の作成

「先行研究の収集および研究者へのヒアリング」「21年度実施の自由記述アンケート調査からの意見分類／比較／構造化による概念整理」「コミュニケーションティーチャーへのヒアリング」によって得られた知見を総合して、「防犯能力」に関連する項目について概念整理（定義）を行った。以下はそれを図示した「概念モデル」（案）である。



測定手法の検討（22～23年度）

プログラム効果検証にはシミュレーション実験、ロールプレイング、ビデオ観察、質問紙法などの方法があり、それぞれに長所・短所がある。例えばシミュレーション実験やロールプレイング、ビデオ観察は「行動」を測定できるという長所もあるが、十分なサンプルの確保にコストがかかったり、実験者や観察者に一定程度の調査スキルが必要であったりするなどの短所もある。一方、質問紙法については「行動」を測定するのが難しい点が短所だが、「態度」「知識」は測定可能であり、標準化された質問紙を用意すれば比較的コストをかけずに大量にデータを集めることができる。また調査実施者の調査スキルは実験の場合に比べてそれほど要求されない。今回の防犯演劇WSの効果測定にはどのような方法がよいと考えられるか、それぞれの長所・短所と今回のプロジェクトの性格を合わせて検討した。

○防犯演劇WSの効果測定のための測定手法の検討

本プロジェクトは最終的に社会実装を目指していることから、より汎用性の高い測定手法が望ましいと考えられ、また、本プロジェクトが力点を置くのは「犯罪に巻き込まれにくい考え方や態度の形成」「防犯のための基本的な知識の習得」「（子どもだけでなく）家庭や地域の防犯意識の向上」であることから、これらを測定できる手法が望ましいと考え質問紙法を評価手法の主軸とした。質問紙法によれば、多人数に対して比較的簡便に実施が可能であり、また「行動傾向」や「態度」などについて標準化された指標による測定が可能である。

ただし、質問紙法を効果検証に使用するためには、小学校低学年の児童にも理解して回答してもらえる内容の質問文や選択肢、集中力が持続する範囲の設問数、使用する言葉・漢字、イラスト表現などを工夫することが必要であると考えられた。

質問紙法を主軸に置きながらも、実験的方法やビデオ分析などの他の手法についても専門家（青山学院大学社会情報学部の高木光太郎教授（発達心理学・法心理学）、九州国際大学法学部の安藤花恵准教授（心理学））の助言を仰ぎながら同時に検討を進めた。「行動」を測定するのに適しているのはやはり実験や観察法であり、質問紙法による調査結果と合わせることによって得られる知見は大きいと考えたからである。

しかし、結果的にはビデオ分析をするための映像を取得しただけで分析を行うまでには至らなかった。ビデオ分析については平成23年度に安藤准教授と意見交換の場を持ち具体的な測定方法についても検討を進めたが、ビデオ映像の解析には人件費や日数などの実施コストが大きく予算を越えてしまう見込みであること、またそのわりには分析がうまくいく勝算が高いとは言えなかったことが理由である。

また、シミュレーション実験についても23年度の実験計画を企画し、実施できるかどうかを関係者で議論したが、これも実施コストが高いということ、プログラムとの連動の問題、実施した場合のリスクなどの様々な問題点が残るため、今回は実施を見送ることとした。

以上のことから、23年度秋以降に行われる社会実験に向けては、質問紙法での子どもとその保護者に対する防犯演劇WS効果測定の評価軸や評価方法の質を高めることとし、23年度の枚方社会実験および京都社会実験において事前事後での効果測定の準備を進めることとなった。

質問紙（指標）設計（22年度）

○「概念モデル」を元にした質問紙の作成

「概念モデル」を元にした質問紙（アンケート用紙）の作成を行った。効果検証を適切に行うためには、測りたい概念（それは抽象的なものであることが多い）を数量的に測定できるようにアンケートの質問文と選択肢を適切に設計しておく必要がある。特に今回は対象が小学校1年生の児童であることを踏まえ、質問文や選択肢を1年生でも理解できる文章であるかどうかに特に注意を払った。具体的には、書店で販売されている小学校1年生の国語のテスト問題での問題数やそこで使われている文章表現やイラスト表現を参考にするなどして、答えやすいかどうか、回答がある程度分散するかどうか（スケールや質問文のニュアンスが適切か）、測りたい概念を測ることができているかどうか等の視点で、㈱応用社会心理学研究所の研究員および心理学を専攻する研究者らが数回にわたって検討を繰り返した。（添付資料①-1，①-2）

予備調査の実施および、「概念モデル」「質問紙（指標）」見直し（22～23年度）

○平成22年度京都社会実験において、WSに参加した子どもとその保護者に対して質問紙法による事後調査を実施。

「「概念モデル」を元にした質問紙の作成」で作成した質問紙を使用し、平成22年度京都社会実験の防犯演劇WS実施直後（平成23年3月7日）に、WSに参加した子どもとその保護者に対して調査を実施した。この調査は予備調査的な位置づけとして行った。調査目的は質問紙のチェック（作成した質問紙が適切であるかどうか）と、WS実施直後の子どもたちや保護者の意識、WSのWebコンテンツの閲覧やWS評価等の実態確認であり，この段階においては「効果測定」は調査目的ではなかった。

・平成22年度京都社会実験時の調査概要

調査実施日

2011年3月7日（月）防犯演劇WSの最終回（発表会）終了後に実施

対象は小学校1年生の児童とその保護者

調査方法

子ども・・・防犯演劇WS終了後、教室にて回答・回収

保護者・・・自宅にて回答後、学校で回収

回収数

子ども・・・115票

保護者・・・117票

調査内容

子ども

・性別
・リスク認知（当事者意識、対人リスク）
・防犯への態度（主張性、逃げることへの態度、一人にならない、チーム力の実感）
・家族とのコミュニケーション（普段のコミュニケーション、防犯演劇WSのこと）
・防犯に関する基本となる知識や理論（安全／危険な場所の認識、具体的対処行動の知識）
・予防行動（一人にならない、スキを見せない）

保護者

・子どもの基本属性（性別、学年、通学形態）
・保護者の基本属性（性別、年齢）
・リスク認知（保護者の当事者意識、対処可能だという意識）
・防犯への態度（親の自覚、地域の力の実感、地域防犯へのコミットメント、地域のまとまり、地域防犯への参加意欲）
・家庭での教育意識（家庭での防犯教育の必要性）
・家族とのコミュニケーション
・防犯に関する知識（防犯の手口についての知識、安全な場所の知識、具体的対処行動についての知識）
・家庭での防犯への取り組み（防犯に関する装備、防犯に関する知識、防犯についてのコミュニケーション、場面想定／シミュレーション）
・防犯演劇WSへの保護者の関与
・発表会への参加
・防犯演劇WSの総合的評価
・防犯演劇WSの個別的評価、防犯演劇WS後の変化

・調査結果

収集したデータの分析によって、仮説通りの概念が確認できるかどうか、仮説通りの関連性（例えば知識や態度があるほど防犯行動をとりやすい等）がみられるかどうかについての確認を行った。

子どものデータからは、「家族とのコミュニケーション」や「主張性」があるほど「防犯行動（予防行動）」についての質問に正答する子どもが多い等の関連性を確認できた（添付資料②-1,②-2,②-3）。ただし、回答分布の偏りやワーディングに改良すべき点がある等の問題があったために結果については参考にとどめるべきであり、23年度の社会実験のデータの分析によって再度確認を行うこととした。

保護者データからも「防犯に対する態度」や「家庭での防犯への取り組み」について因子構造の確認と、それらの概念の関係性について分析を行い、概念モデルや測定指標の改定の参考にした。また，保護者データからは、保護者のワークショップの評価および関与の高さも確認することができた。保護者の8割以上が防犯演劇WSに対して肯定的な評価を寄せ、発表会には9割が参加し、ワークショップのことを子どもとよく話した割合も7割近くを占める結果になった。（添付資料③）

○防犯演劇 WS 実施校（22 年度京都社会実験）と非実施校の比較検討

平成 22 年度京都社会実験の調査結果の解釈および、質問紙の改善点等を検討するために、防犯演劇 WS を実施していない比較対照校 2 校（公立の小学校）において同様の質問紙を用いた調査を実施し、学校間で回答結果に違いが見られるかどうかを確認した。

子どもについて結果をみると、「知識」はどの学校でも正答がほとんどを占めたのに対して、リスク認知や主張性などの「態度」は WS を実施した学校の児童の方が実施していない学校の児童よりも正答率が高かった。ワークショップ効果によるものかどうかは、1 時点の調査であり対象の基本的な条件（公立／私立や、学校環境の違い、通学手段の違いなど）が異なるために判別できないが、「態度」には子どもが置かれる状況や条件によって何らかの違いが見られるということを確認できた。なお、保護者についても子どもと同様の傾向がみられた。（添付資料④）

○「概念モデル」および「質問紙（指標）」の見直し

これまでの調査データの分析結果（21 年度の京都での社会実験時の事後調査、WS を実施していない比較対照校調査）を吟味し、さらに「リスク」に関する研究（上市・楠見 1998、2000、2006）※1 等において扱われている概念を参考にして、概念モデルを改定した。（添付資料⑤）

その後，概念モデルに合わせて測定する項目を見直し，答えやすさや回答分布を考慮してワーディングを整えるなど，測定指標（質問紙）の改定を行った。（添付資料⑥-1，⑥-2，⑥-3，⑥-4）

＜概念モデルの改定点＞

・初版の「リスク認知（犯罪不安）」の概念を精緻化し，以下のように概念的に区別した。

＊リスク認知
対象に犯罪リスクがある（＝犯罪に巻き込まれる可能性を含んでいる）ことを認識しているかどうか。

＊犯罪不安
犯罪に巻き込まれるかもしれないことへの不安感。

＊リスク帰属（制御可能性）
対象が持つ犯罪リスク（＝損失が生じる可能性）は、自分の行動によって決まるのか、運・不運によって決まるのかという態度。
リスクを自分の行動次第で抑え込むことができるか（制御可能性）ということ。

＊防犯行動の困難さ（制御幻想）
客観的確率が保障しているよりも不適切に高く成功確率を期待し、犯罪場面に出くわしても簡単に回避できると安易に考えていること。

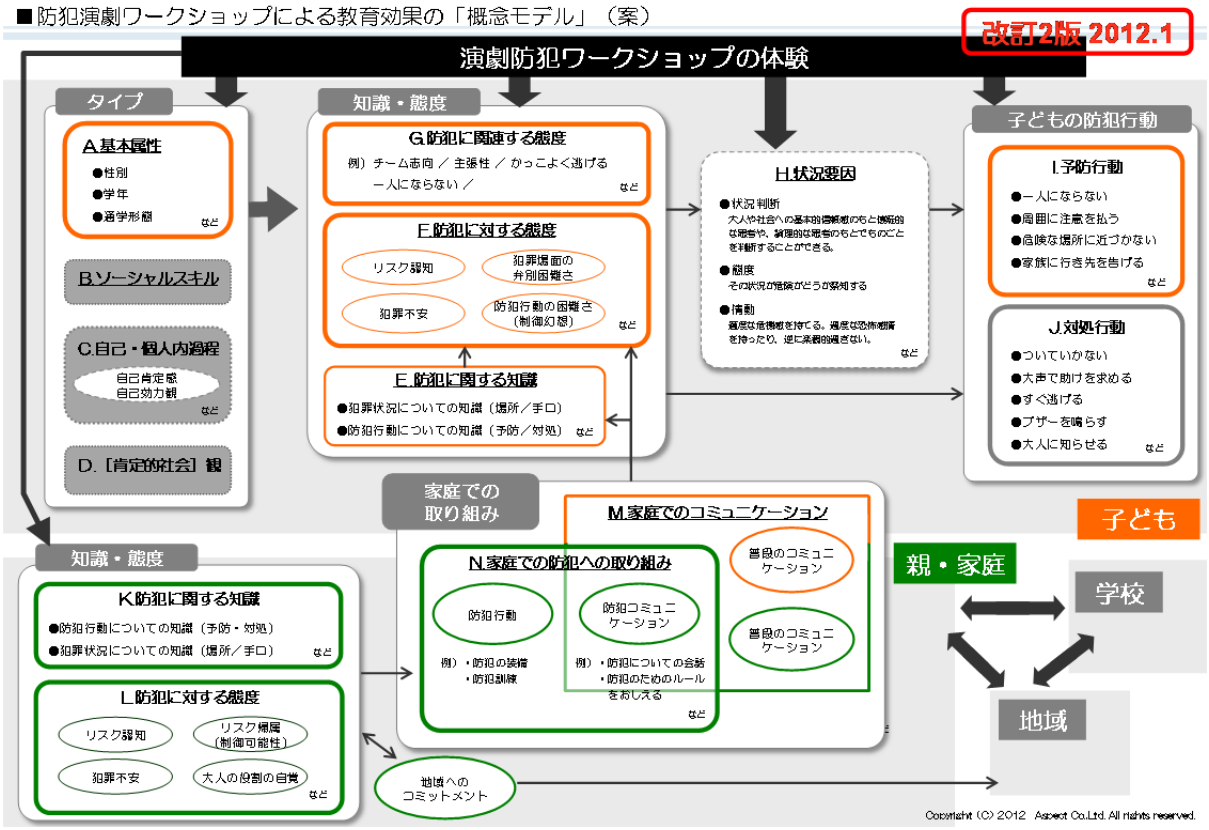
＊犯罪場面の弁別困難さ
不審者あるいは犯罪行動かそうでないかは見た目では区別することは難しいという意識

・「教育意識（家庭で防犯に関して教える必要性意識）」は、「大人の役割の自覚」という概念の 1 項目として統合。

・「家庭での防犯への取り組み」は、行動的側面（防犯行動）と、コミュニケーション的側面（防犯コミュニケーション）に区別した。

※1）参照文献

・上市・楠見　1998　パーソナリティ・認知・状況要因がリスクテイキング行動に及ぼす効果　心理學研究　69(2)，81-88
・上市・楠見　2000　後悔がリスク志向・回避行動における意思決定に及ぼす影響 ： 感情・パーソナリティ・認知要因のプロセスモデル
認知科学　7(2)，139-151
・上市・楠見　2006　環境ホルモンのリスク認知とリスク回避行動　認知科学　13(1)，32-46



防犯演劇WSの効果測定と検証（23～24年）

上記の検証によって改定された測定指標（質問紙）を用いて、WS 事前・事後での質問紙法による効果測定調査を、22 年度に行われた枚方での社会実験時（予備調査）および、京都での社会実験時（本調査）にて実施した。

○平成 23 年度枚方社会実験での、防犯演劇 WS 効果検証（予備調査）

改定された測定指標（質問紙）を用いて、平成 23 年度枚方社会実験において、WS の事前と事後それぞれ、参加した子どもとその保護者に対して調査を実施し、回答結果に変化がみられるかどうかを確認した。なお、この時の枚方社会実験の参加者数は 30 名程度と少なく、また学年も 1 年生から 6 年生にわたっていた。そのために誤差が大きくなることや、学年の違いによる効果のあらわれ方に違いがある可能性があることなど、調査結果には WS 効果以外の様々な要素が混入する可能性が高いと考えられる。よって、結果解釈はあくまでも参考程度にとどめ、この調査自体は予備調査的な位置づけとした。本調査は翌平成 24 年の 1 月から開始される京都社会実験で行うこととした。

・平成 23 年度枚方社会実験時の調査（予備調査）の概要

＜事前調査＞

調査実施日
2011 年 11 月 19 日（土）、防犯演劇 WS 初回開始前

調査方法
子ども・・・質問紙を予め参加者の自宅に郵送し，自宅で回答
保護者・・・質問紙を予め参加者の自宅に郵送し，自宅で回答

回収数
　子ども・・・35 票
　保護者・・・27 票

＜事後調査＞

調査実施日
　2011 年 12 月 4 日（日）、防犯演劇 WS 最終回（発表会）終了時

調査方法
　子ども・・・教室にて回答・回収
　保護者・・・子どもが自宅へ質問紙を持ち帰り自宅で回答、郵送で回収

回収数
　子ども・・・33 票
　保護者・・・18 票

※対象は事前・事後ともに防犯演劇 WS に参加した子ども（枚方市内の公立小学校 1～6 年生）とその保護者。

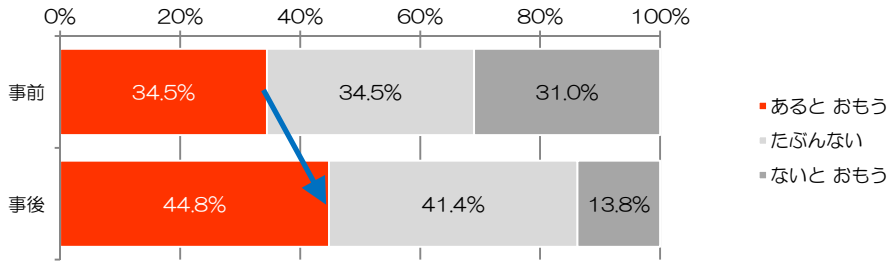
・効果検証の結果

平成 23 年度枚方社会実験にて取得した WS 事前･事後データを分析し､WS 効果の検証を行った。結果、子どもの「防犯に対する態度」項目のうち、「リスク認知」や「犯罪場面の弁別困難さ」「主張性」などの項目について WS 前後で意図した通りの変化が確認できた。一方で、「制御幻想（じぶん一人でやっつけられると思うか)」については、「そう思う」という意図した方向とは逆の回答が事後で増加する傾向がみられ、今後の WS で特に注意して子どもたちに伝えていく必要があると考えられ今後の課題となった。その他、「知識」や「家庭でのコミュニケーション」に顕著な変化は見られなかった。ただし、枚方社会実験においては分析サンプルが 30 名以下と少ないこと、対象学年が小学 1 年生～6 年生までバラバラであることから、結果解釈はあくまでも参考程度にとどめるべきである。

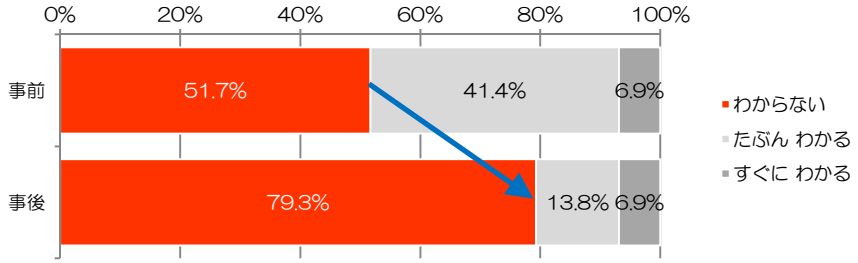
※分析は事前・事後の両方のデータが得られた29名を対象にしている。

・「リスク認知」

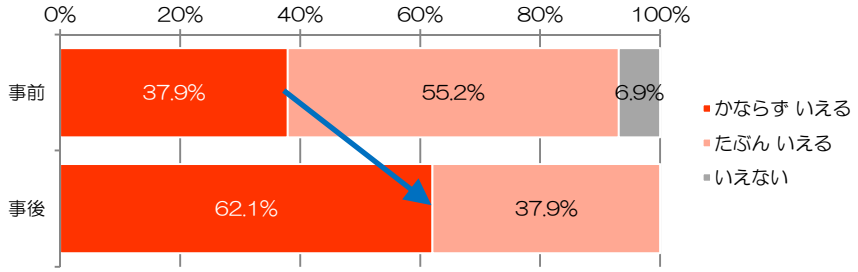
Q1(1)じぶんにも わるい人が こえを かけてくることが あると　おもいますか？



・「犯罪場面の弁別困難さ」
Q1(3)わるい人は かおや みためで すぐに わかると おもいますか？



・「主張性」
Q1(6)ともだちに いやなことを されても いやなことは いやだと
はっきり いえますか？



○平成 23 年度京都社会実験での、防犯演劇 WS 効果検証（本調査）

改定された測定指標（質問紙）を用いて、平成23年度京都社会実験において、WSの事前と事後それぞれ、参加した子どもとその保護者に対して調査を実施し、回答結果に変化がみられるかどうかを確認した。なお、今回は対照群を設定できなかったために、事前に比べて事後の結果が改善されていたとしてもそれが防犯演劇WSの効果であると言い切ることはできない。しかし、それでもWSは約1か月という短い期間内に実施されていることから他の防犯教育などの影響はほとんど無いと考えることができ、今回の事前・事後の変化をもって防犯演劇WSの効果とみることは妥当であると判断した。この結果については、他グループ（統括グループ・政策実装グループ・Webコンテンツグループ・CT育成グループ）と共有するとともに、専門家を交えて結果の解釈等についての議論を実施した。

・平成 23 年度京都社会実験時の調査(本調査)の概要

＜事前調査＞

調査実施日
2012 年 1 月 31 日（火）防犯演劇 WS 初回開始時

調査方法
子ども・・・教室で回答・回収
保護者・・・子どもが自宅へ質問紙を持ち帰り自宅で回答、子どもが学校に持参して回収

回収数
子ども・・・115 票
保護者・・・112 票

＜事後調査＞

調査実施日
2012 年 3 月 7 日（水）防犯演劇 WS 最終回（発表会）終了後

調査方法
子ども・・・教室で回答・回収
保護者・・・子どもが自宅へ質問紙を持ち帰り自宅で回答、子どもが学校に持参して回収

回収数
子ども・・・118 票
保護者・・・106 票

※対象は事前・事後ともに防犯演劇 WS に参加した子ども（京都市内の私立小学校 1 年生）とその保護者。

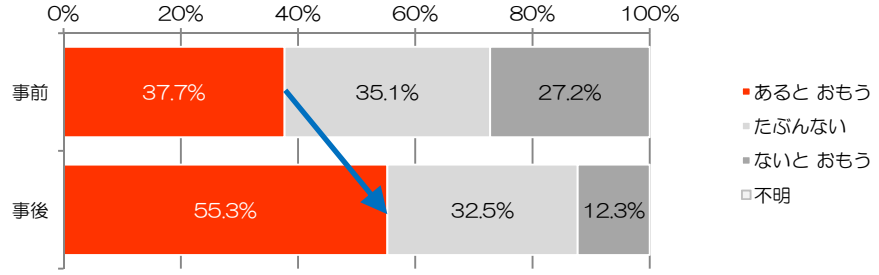
・効果検証の結果

平成 23 年度京都社会実験にて取得した WS 事前･事後データを分析し､WS 効果の検証を行った。

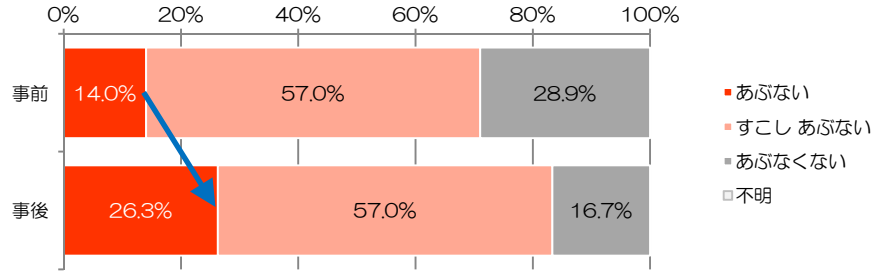
★子どもへの効果
防犯演劇WSの事前と事後を比較したところ、「防犯に対する態度」の項目の「リスク認知」「犯罪場面の弁別困難さ」「制御幻想」という防犯行動をとるための重要だと考えられる態度項目について顕著な変化を確認することができた。
具体的に変化をみると､「リスク認知」の「じぶんにも わるい人が こえを かけてくることが あると おもいますか？」「学校から ひとりで かえるのは あぶないと おもいますか？」という設問に対する望ましい回答「あると おもう」「あぶない」の割合は、事前ではそれぞれ37.7%、14.0%であったのに対して事後では55.3%、26.3%と、それぞれ17.6ポイント、12.3ポイント増加した。また、「犯罪場面の弁別困難さ」の「わるい人は かおや みためで すぐに わかると おもいますか？」という設問に対する望ましい回答「わからない」の割合は、事前では57.0%であったのに対して事後では71.1%であり14.1ポイント増加した。さらに、「制御幻想」の「もし わるい人に あって うでを つかまれても たたかって やっつけられると おもいますか？」という設問に対する望ましい回答「そう おもわない」の割合は、事前では53.5%であったのに対して事後では67.5%であり14.0ポイント増加した。

※分析は事前・事後の両方のデータが得られた114名を対象にしている。

・「リスク認知」
Q1(1) じぶんにも わるい人が こえを かけてくることが あると おもいますか？

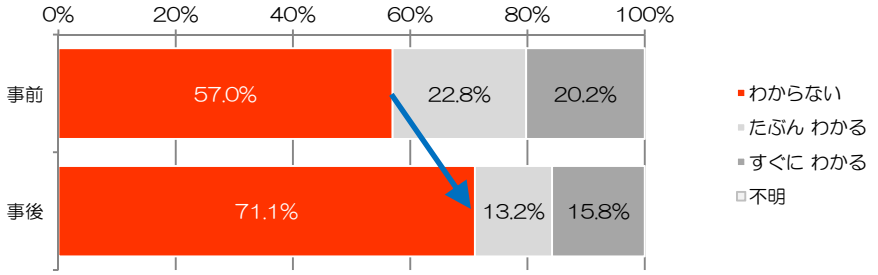


Q1(2)学校から ひとりで かえるのは あぶないと おもいますか？



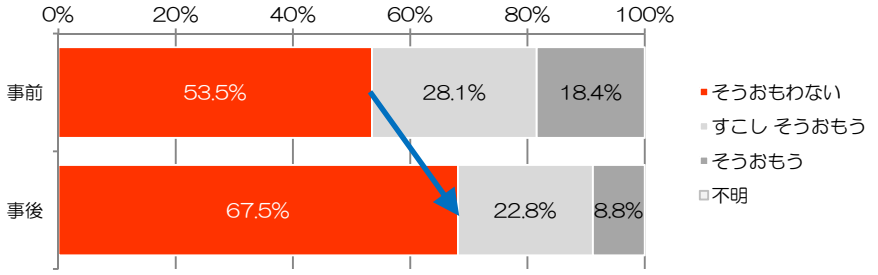
・「犯罪場面の弁別困難さ」

Q1(3)わるい人は かおや みためで すぐに わかると おもいますか？



・「制御幻想」

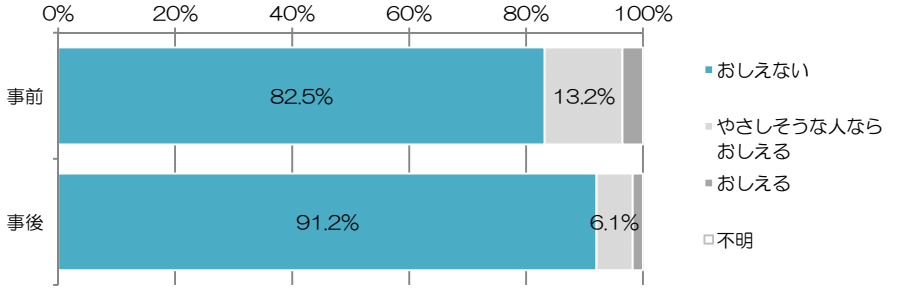
Q1(4)もし わるい人に あって うでを つかまれても たたかって やっつけられると おもいますか？



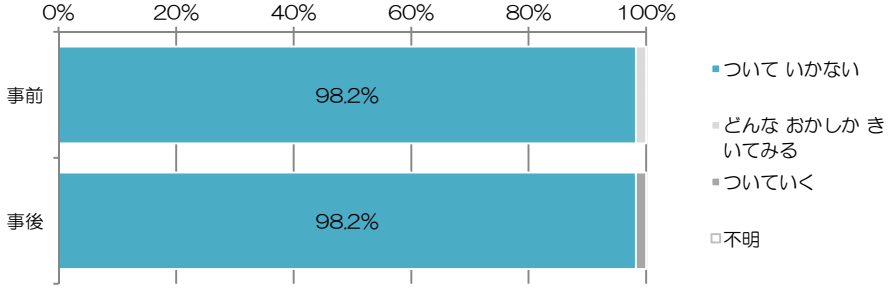
「防犯に対する態度」項目で顕著な変化がみられたのに対して、「防犯に関連する知識」については変化がほとんどみられなかった。特に「いかのおすし」に代表される「対処行動についての知識」はWSの実施前から正答率が8～9割と既に一定水準に達している。一方「危険な場所」や「子ども110番」についてはWS前に「しっている」と回答した割合は45.6%と半数に満たない状態であり、事後でも52.6%とわずかしか増加しなかった。「対処行動の知識」に比べると「場所の知識」認識は低いと考えられ防犯教育上の今後の課題と言えるのかもしれない。

・「対処行動の知識」

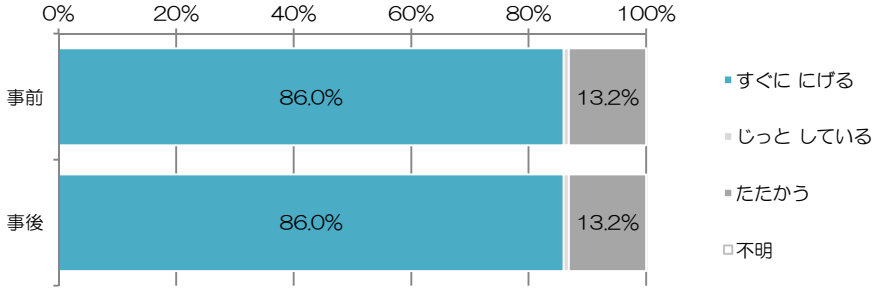
Q2(1)しらない人に なまえを きかれたら どうしますか？



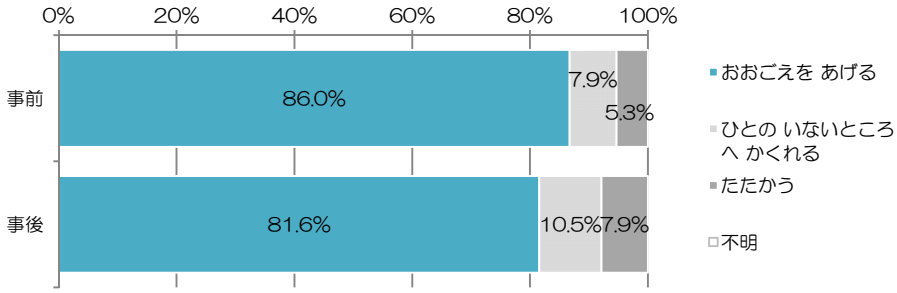
Q2(2) しらない人に おかしを あげるから いえに おいでといわれたら どうしますか？



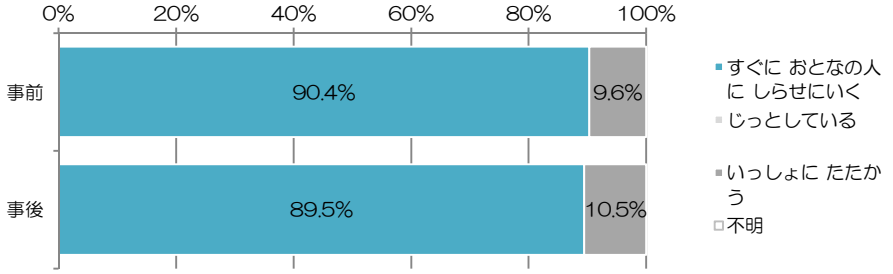
Q2(3) しらない人が きて きゅうに あなたの うでをつかんできたら どうしますか？



Q2(4) しらない人が あなたを おいかけてきたら どうしますか？

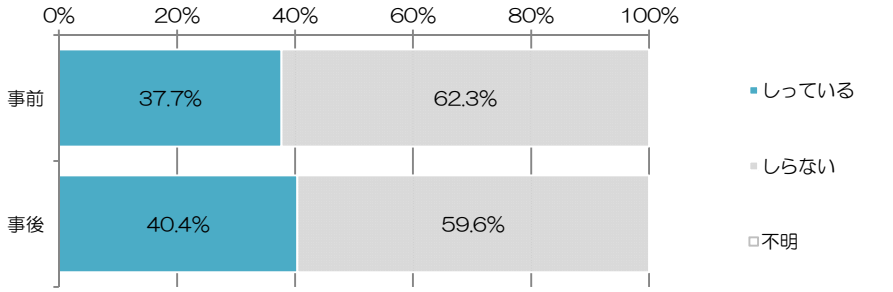


Q2(5) ともだちが しらない人に うでを つかまれたらどうしますか？

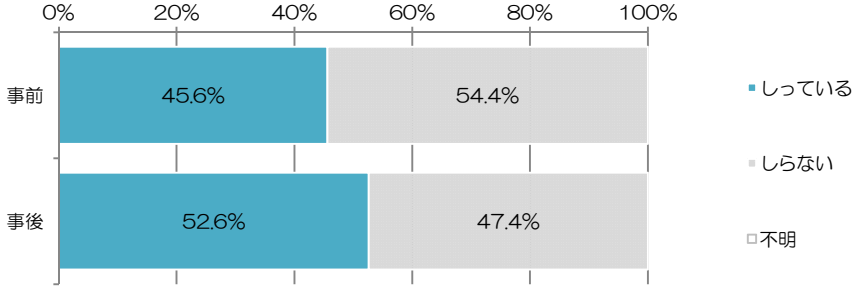


・「危険な場所／安全な場所の知識」

Q3(1) かえりみちにある 「きけんな ばしょ」や「わるい人に あいそうな ばしょ」を しっていますか？



Q3(2)もし わるい人に あったときに たすけてくれる「こども110ばん」の おうちや おみせを しっていますか？



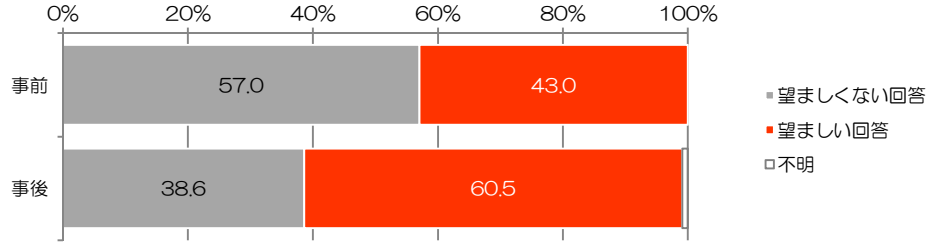
今回のアンケートでは場面を想定させて「もし～なときあなたはどうする？」「そのときどう思う？」「どんな気持ちになる？」という形で尋ねる問題も設けていた。この設問の回答を組み合わせることによって、ある場面に対してどのような行動をとるかのみならず、その行動をとる理由づけが適切かどうか、その場面に危機感を抱けるかどうかなど、行動と認識がセットで望ましい回答ができたかどうかを確かめることができる。

結果をみると、今回の防犯演劇WSのコンテンツに関わりがある「距離をとる（ちかよらない）」「おねえさんに話しかけられる」という内容を含む場面想定については、事前と事後を比較すると望ましい回答が顕著に増加している傾向（43.0%から60.5%と17.5ポイント増加）を確認できた。一方、今回のコンテンツ内容とはあまり関連がない「公園に遊びに行って一人だった」という場面については、事前と事後を比較してわずかに望ましい回答が増加傾向（49.1%から57.9%と8.8ポイント増加）にあるものの、前者に比べるとその傾向は弱いことがわかった。ワークショップコンテンツの内容と重なる内容はしっかり効果があったとみることができそうであるが、反対にコンテンツの内容から外れる内容については，効果の波及は限定的であるということを示していると考えられる。

なお，他の項目の集計結果については添付資料を参照（添付資料⑦）。

・場面想定質問（おねえさんに話しかけられて・・・）

Q5 かえりみちで しらない おねえさんに あいました。おねえさんは みちに まよっていて 「この おみせの ばしょを おしえて ください」といって しゃしんを みせてきました。



「望ましい回答」とは以下の太字の選択肢。

(1) あなたは どうしますか？
①ちかよって しゃしんを みる **②ちかよらない**

(2) あなたは この おねえさんを どんな人だと おもいますか？
①こわい人 ②やさしい人 **③みただけでは わからない**

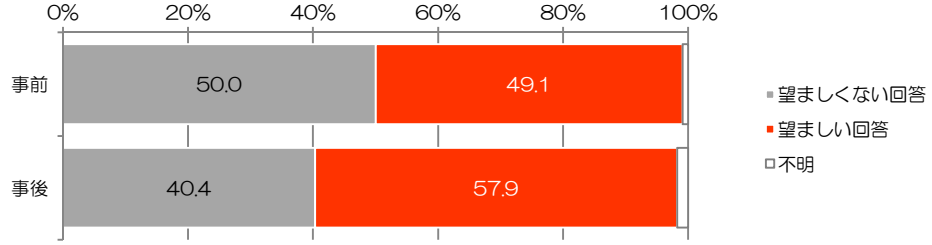
(3) おねえさんに 「このあたりは よくしらないから いっしょに ついてきて くれるかな」といわれたら どうしますか？
①こまっている人を たすけたいので いっしょに ついていく
②やさしそうな人 だったら いっしょに ついていく **③ついて いかない**

(4) おねえさんに 「ついてきて ください」 と いわれたときの あなたの きもちは どれですか？
①こわい ②すこし こわい ③こわくない

（1）～（4）全て望ましい回答をできた人の割合を上記のグラフに示している。

・場面想定質問（誰もいない公園で・・・）

Q6 いつも あそんでいる こうえんに いきました。こうえんには だれも 人がいなくて あなたひとりです。



「望ましい回答」とは以下の太字の選択肢。

（1）あなたは だれもいない こうえんで ひとりで あそびますか？

①ひとりで あそぶ　②すこしだけ あそんで かえる　**③すぐに いえに かえる**

（2）だれも いない こうえんで ひとりで あそぶことは あぶないと おもいますか？

①あぶない　②すこし あぶない　③あぶなくない

（1）～（2）全て望ましい回答をできた人の割合を上記のグラフに示している。

★保護者への効果

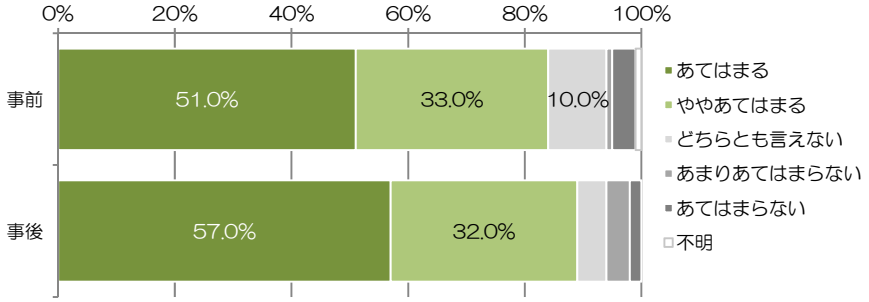
保護者について防犯演劇WSの事前と事後を比較したところ、「家庭での取り組み」「家庭でのコミュニケーション」「防犯に対する態度」「防犯に関する知識」などのどの項目にも顕著な変化はみられなかった。「防犯に対する態度」が顕著に変化していた子どもの結果とは対照的である。小学校低学年への介入によって子どものみならずその保護者にまで防犯意識や行動の波及を期待していたプログラムであるが，残念ながら短期的にはその効果を確認することができなかった。今回の演劇WSの対象校の保護者の防犯意識ははじめから高い水準にあったこと，および発表会に保護者が参加しなかったことやWebコンテンツを利用した保護者が少なかったことなどの関与の低さが原因であると考えられる。以下にそれぞれの項目を抜粋して示す。

なお，他の項目の集計結果については添付資料を参照（添付資料⑧）。

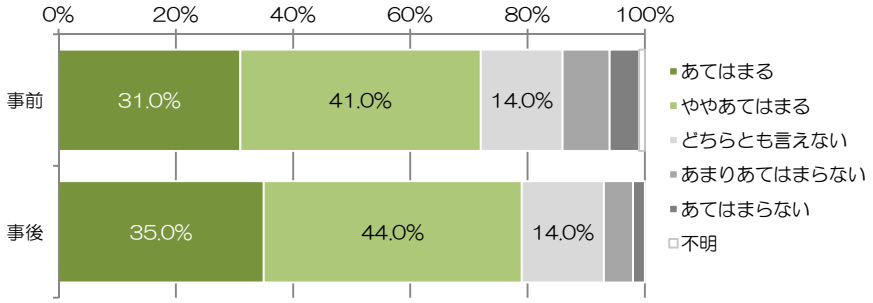
※分析は事前・事後の両方のデータが得られた100名を対象にしている。

・家庭での取り組み

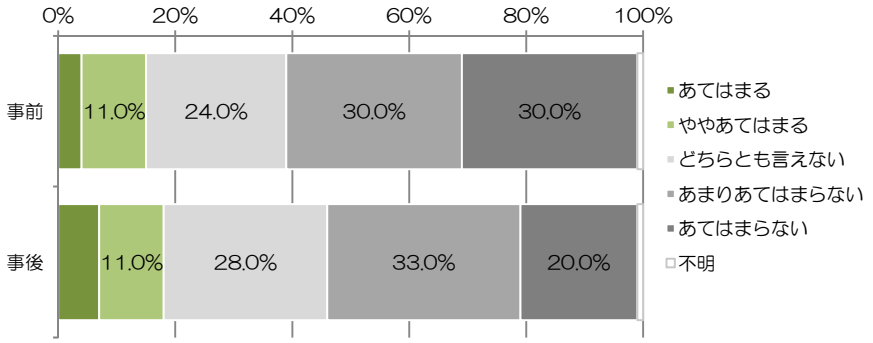
Q5（5）お子さんとの間で，防犯のために「してはいけないこと」や「ルール」 を決めている



Q5（6）防犯について，「こんな時はどうする？」など，具体的な場面を 子どもに考えさせて教えている



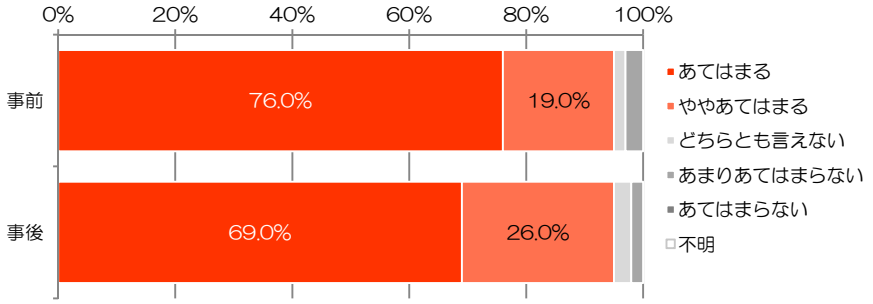
Q5（7）家庭でも，声を出したり体を動かしたりして防犯の訓練をしている



・防犯に対する態度

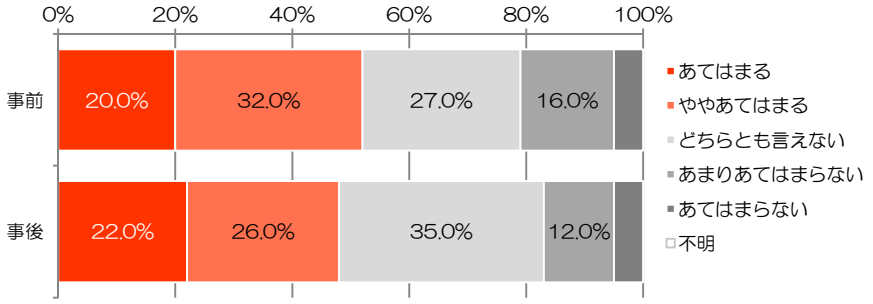
＊リスク認知

Q7/Q10（4）通学路などの身近な場所でも，犯罪に遭う危険性が十分あると思う



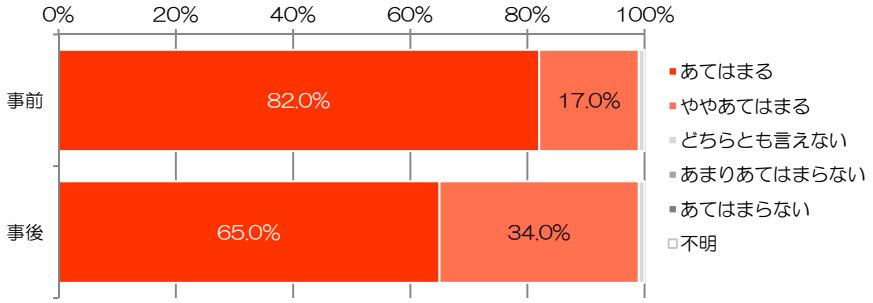
＊原因帰属（対処可能性）

Q7/Q10（9）子どもでも，防犯の知識や習慣を身につけることで，犯罪被害をほぼ 防ぐことができる



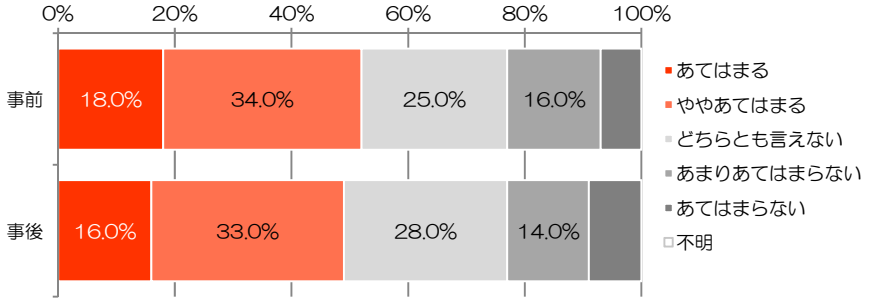
＊大人の役割の自覚

Q7/Q10（12）子どもたちを犯罪から守るためには，親など保護者の自覚が必要だと思う

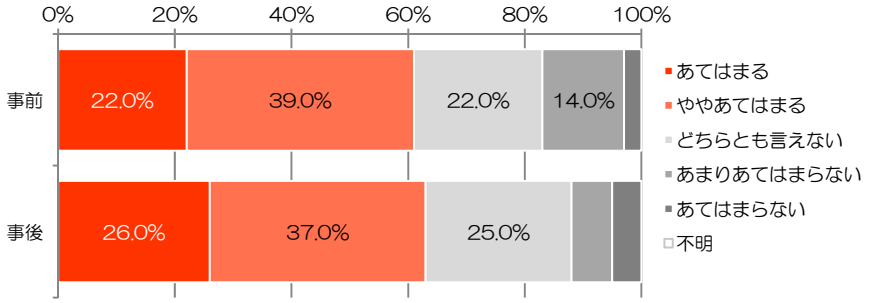


＊地域へのコミットメント

Q7/Q10（14）日頃から，地域の行事に参加したり，助けあったりしている

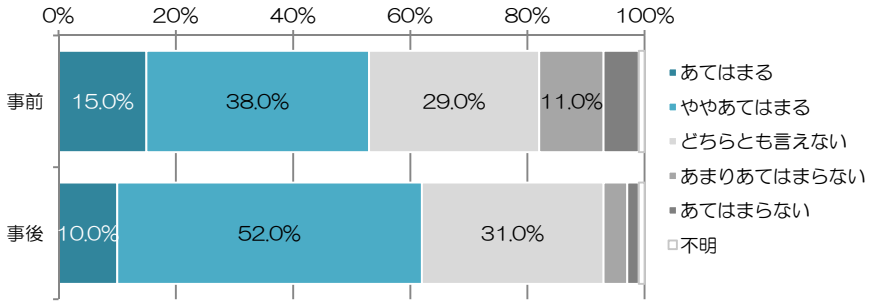


Q7/Q10（15）自分の子どもだけではなく，他の子どもたちにも，声かけなど注意を向けている

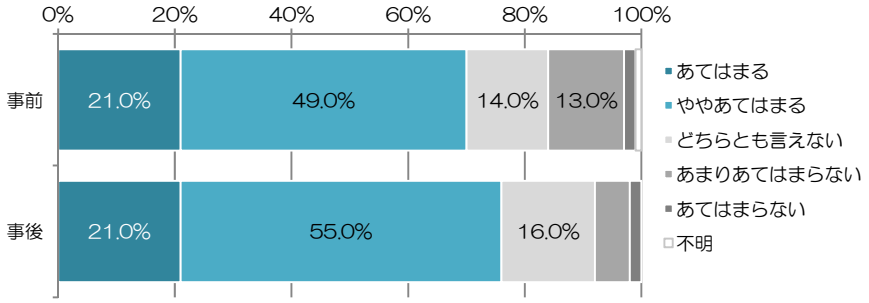


・防犯に関する知識

Q7/Q10（1）どのようにして（どんな手口で）子どもたちが犯罪に遭っているのか だいたい知っている



Q7/Q10（2）自分の子どもの通学路にある危険な場所を把握している



○防犯演劇 WS の効果検証のまとめと考察

本プロジェクトで行った防犯演劇WSの効果検証の結果、「防犯に対する態度」については一定の効果があることが確認できた。　防犯演劇WSの効果としては、特に「防犯に対する態度」の項目の「リスク認知」「犯罪場面の弁別困難さ」という防犯行動をとるため重要だと考えられる態度項目については、本調査、予備調査の両方で有用な効果があることが確認されている。この点については後述する有識者からの評価でも、実施期間や測定方法の妥当性の観点から同意をいただいている。

ただし、前述した対照群の設定ができていない問題や、実施条件の変化によって効果にどの程度の差異が生じるか、という点についてはプロジェクト実施期間中に検証することが難しかったため今後の課題として残っている。

逆に「防犯に関する知識」や、「防犯に対する態度の項目」の「制御幻想」の項目では、本調査・予備調査のどちらも顕著な変化が認められない、測定結果が異なっている、などの理由から有用な効果は明確に確認できなかった。ただし、WSコンテンツの内容によって効果が異なることを示す結果もでていることから、今回の結果を元に、「防犯に関する知識」の項目に対応するために、危険な場所や子ども110番の家の場所を議論する内容を入れる、危険な状況になった場合には逃げることを第一に考える事をWS中に徹底して伝える、などのWSコンテンツや指導者の指導方法について改善を重ねる事で、効果を高められる可能性もある。

有識者からのフィードバックでは、今回の効果検証の結果をコンテンツに反映させ、WSを行う上で重点を置くポイントの参考にするなど効果を高める為に活用できる可能性についても示唆していただいた。今回開発した効果検証のノウハウをプログラムの質向上に活かしながら、より高い教育効果を発揮するために活用していきたい。

防犯演劇 WS の各ステークホルダー評価のまとめ（24 年度）

○各ステークホルダーによるプログラム評価のとりまとめ

保護者が防犯演劇ワークショップに何を期待し、実施後どのように評価したのかについて、22～23年度の京都社会実験時のデータおよびこれまでの社会実験時のデータをもとに確認。また、実施主体者（小学校の教諭）への防犯演劇ワークショップの運営や効果についてのインタビューを実施するとともに、コミュニケーションティーチャーに対しては自己評価のインタビューを実施。上記データをもとに各ステークホルダーによる防犯演劇ワークショップ・プログラムの評価についてのとりまとめを行った。

★保護者の評価

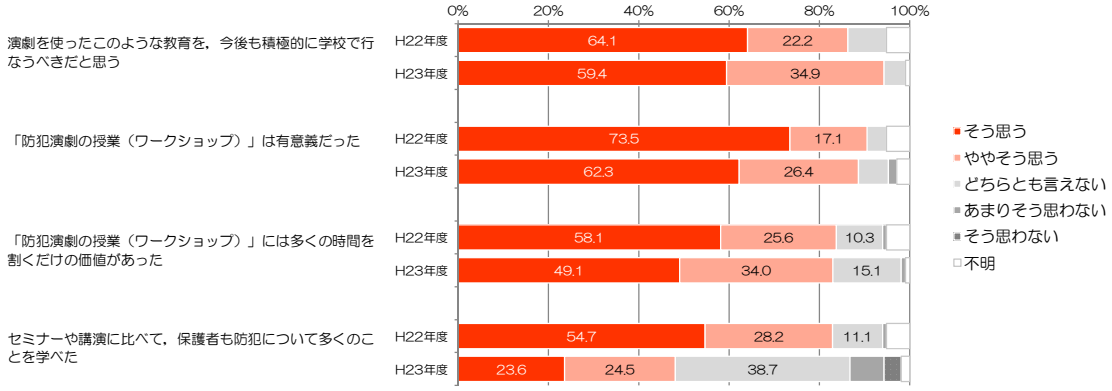
＊防犯演劇WSへの評価

平成22年度、23年度の京都社会実験終了後、WSの参加者の保護者に対して「WSの評価」についてたずね，両年度ともに8割以上の人から概ね高い評価を得ていることを確認した。具体的には「演劇を使ったこのような教育を、今後も積極的に学校で行うべきだと思う」という設問に対しては平成22年度で86.3%、平成23年度では94.3%が「そう思う」

「ややそう思う」と肯定的に回答。また「防犯演劇の授業（ワークショップ）は有意義だった」についても肯定的な回答がそれぞれ90.6%、88.7%，「「防犯演劇の授業（ワークショップ）」には多くの時間を割くだけの価値があった」についても肯定的な回答が83.7%、83.1%を占めていた。ただし、「セミナーや講演に比べて、保護者も防犯について多くのことを学べた」という設問については，平成22年度では肯定的な回答が82.9%を占めていたのに対して，平成23年度では48.1%と半数を下回った。これには、平成23年度のコンテンツでは、それまでにはあった「保護者の演劇発表会への参加」が無くなったことなど、保護者のWSへの関与がそれまでと比べて低下したことが原因ではないかと考えられる。

・防犯演劇WSに対する保護者の評価

※集計対象者数・・・平成22年度：117名，23年度：106名



※保護者のWSへの参加・影響

学校教育の現場におけるWSでは、そこでの授業で経験・体験したことを子どもが家庭で保護者に話したり，保護者も関与することなどにより，子どものみならず保護者に対しても働きかけができるという効果も期待される。今回の平成22年度，23年度の京都社会実験では、子どもが学校で習ったこと・体験したことを家で保護者と話したかどうか，WSを経て保護者自身の意識や行動に変化があったかどうかを，社会実験終了後にアンケートでたずね、関与や影響の度合いを確認した。

「防犯演劇WSのことをよく子どもと話したか」については、平成22年度では70.1%，平成23年度では69.8%と，両年度ともに約7割の保護者が「そう思う」「ややそう思う」と回答し、WS内容について子どもと話をしていたことが確認できた。保護者自身の変化についてみても、「危険な目に遭ったときに，どう対処すればよいか教えるようになった」「防犯関連の話題で，お子さんと話をするようになった」という設問に対して7割半ばが「そう思う」「ややそう思う」と回答しており、防犯に関する話題が子どもとの間で増加している傾向があったことが確認できる。

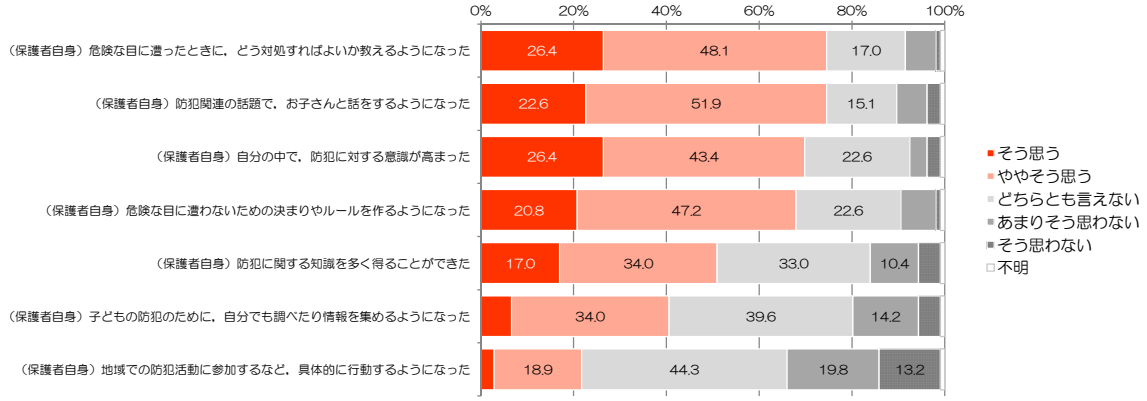
保護者自身の変化については、「自分の中で，防犯に対する意識が高まった」「危険な目に遭わないための決まりやルールを作るようになった」項目でも約7割が「そう思う」「ややそう思う」という高い割合になった，一方で「子どもの防犯のために，自分でも調べたり情報を集めるようになった」「地域での防犯活動に参加するなど，具体的に行動するようになった」など、保護者自身の行動の変化に関する項目については「そう思う」「ややそう思う」がそれぞれ40.7%、21.7%にとどまり、子どもとのコミュニケーションの変化や意識の変化に関する項目と比較すると、変化の割合は比較的低い傾向となった。

・防犯演劇WSのことをよく子どもと話したか

※集計対象者数・・・平成22年度：117名，23年度：106名

・保護者自身の意識や行動の変化（平成23年度）

※集計対象者数・・・106名



★実施主体者及びコミュニケーションティーチャーへのインタビュー結果の考察

インタビューはどちらも下記の項目について行い、両者の認識の相違点を調査した。

・総合的な評価
・WSの評価
　-コンテンツ内容面（良い点、悪い点）
　-子どもとの接し方（良い点、悪い点）
　-コミュニケーション・オペレーション面（良い点、悪い点）
　-その他（良い点、悪い点）
・WSの効果
　-意識や態度面
　-知識面
　-行動面
　-マナー面
　-その他
・プロジェクト全体への意見
・その他

それぞれの項目について、主な意見と考察は以下の通りである。

	実施主体者（小学校教諭）	CT	考察
総合的な評価	防犯に意識を向けるきっかけにはなったと思うが、具体的なプログラムの効果については、あるとも無いとも言えない。	防犯的な知識や態度の育成につながっているのかは分からない。ただし、演劇を通して体験する事で様々な変化はあらわれている。	防犯という日常で触れる機会が少ない領域での教育効果については、プログラムの運営者からは客観的にとらえる事は難しいと考えられる。

WSの効果	舞台の立ち方等、劇を作る経験ができたり、表現力を付ける教育ができたりした事は普段の教育ともつながるものだった。また子ども達が自主的に練習するなど普段は見られない熱意が見られた。	演劇の台詞を休憩時間にも使う等、内容が浸透している部分もあった。子ども達同士の関わりの中で防犯とは関係ない部分（チームワーク、主体性等）での成長も感じられた。	防犯演劇を行うことで、子ども達が主体的にプログラムに関わる確率が高まっていると考えられる。ただし、それが直接的に教育的効果につながっているかは検証の必要がある。 社会実装化の中で（学校を対象とする場合）防犯能力の向上のみを目的にするのではなく、本WSを行う事で同時に達成できる効果も併せて説明することで実装化につながりやすくなると考えられる。
その他	子どもへの接し方について普段の学校の方針とは違う部分がある。（良い意味でも悪い意味でも）	指導するにあたり、防犯というテーマは専門性が高い。	指導上の注意点をとりまとめることや、指導者の育成については今後の課題だと言える。

★有識者からの評価

インタビュー形式で効果検証の結果を見ていただきながらフィードバックのコメントをいただいた。主に以下のような意見があった。（全文は下部に記載。）

- 測定方法と結果からWSによってプロジェクトで定義している防犯能力の向上に対して効果があることは認められる。ただし、対象年齢や地域、公立学校と私立学校の違いなど、アンケートを実施する対象の属性の違いに関わらず効果があると言えるかどうかは今後測定を重ねる事で精度を高めて行く必要がある。
- 演劇ワークショップに効果がある事は分かったが、演劇ワークショップとしての独自性を効果測定の観点から示すことが今後の課題である。
- 測定結果をWSのコンテンツに活かして行く事で、より実施対象に効果の高い指導を行う事ができる

※有識者へのヒアリング内容　全文

□大阪教育大学　教授　藤田大輔氏

2012年7月12日にヒアリング

- 立命館小学校での保護者の態度が，WS事後で変化しなかったのはもともとが高いということかもしれない。もしくは発表会の有無の影響も考えられる。
- （自身の研究の中では）低学年では回答が一貫していないところがあった。また、ワークショップの効果の度合いは担当した学校の先生の力量によるところも大きく，クラスによる反応の違いなどがみられた。さらに、分析からは親子関係が重要であると言えそうな結果になっている。親子関係が良好な方が，家庭での話す機会など振り返りが多くなるためか教育効果が大きくなっているという可能性もある。
- 演劇ワークショップの独自性が明確になると良い
- 今回の結果についてどこまで一般化できるか。（自身の研究では）学校による結果の違いが出ている。保護者の意識などは学校や地方によって大きく異なっている場合がある。

□千葉大学教育学部　教授　藤川大祐氏

2012年8月14日にヒアリング

- 事前事後の期間が1か月間程度なので、変化はワークショップによるものが大きいとしてもよいだろう。効果のある部分と無い部分を分析する事ができるので、コンテンツに活かしていくことができる内容だといえる。
- ワークショップ内容の優先順位の付け方について、犯罪の統計等に併せて演劇のシーン

や、強調して伝えるメッセージ等を工夫していくと良い。また、演劇ワークショップの効果説明について、あえて比喩的な表現を使って学んでいることの説明もしていくと良いだろう。

・直接 WS の中で触れている部分には効果があるとのことだが、そういった項目については事前にも比較的高い水準で理解されている。むしろ、事前に数値が低い「子ども 100 当番の場所」や「孤立はだめだ」ということを教える内容にしていけると良いのではないか。必要があれば、事前アンケートの結果を踏まえて、個々の生徒にどのように対応するのかも対応ができる。例えば、犯罪に合いやすい特徴を持った子どもは全体の 1 割程度という仮説を持った場合、事前調査でリスクが高そうな子どもに対して、配役や内容を修正できる可能性がある。

・保護者への効果について現在の結果を見ると、改めて防犯について注意をする事には同意するが、自分が勉強する必要性についてはあまり感じていないと読み取れる。

□青山学院大学 教授　苅宿俊文氏

・コンテンツの変容に関しては大きな意味を持っているがどこで扱うのか、よりよくしていった過程には大きな知見が込められている。

・リスク認知について大きな変容があった事が認められる。これらについては、演劇ワークショップのどのような要素が原因で向上したのか、仮説を立てて論証していく事が望ましい。（自身の過去の研究から推測すると）上記の効果は単に知識を得たのではなく、意味を形成したといえるだろう。できれば、他の教育と差別化されるような効果について立証していってほしい。

・保護者の変化について、家で 6 割の生徒が授業内容について話していることは他と比べると高い数値だといえる。

・演劇ワークショップだからこそ出し得る成果とは何か、今回の測定結果から推測し、今後に活かしていける仮説を立てていただきたい。

22 年度　地域防犯・安全の演劇 WS 展開モデル作成の為のプチ・タウンミーティグ実施

2010 年度、政策化・実装グループがメインとなり、地域の実践家との直接対話の場として「プチ・タウンミーティング」を展開した。

4 回にわたるタウンミーティングでは、開催場所ごとに内容が検討され、その地のキーパーソンに応じて実装化レベルを想定し、既に取り組まれている演劇 WS を通じた子どもの安全のための地域防犯活動がどのように定着し、他地域への示唆を与えられるか、文化的背景に着目して、その特性を析出していくことに努めた。

■ 第1回　「社会的実装とは？」
日時：7 月 22 日
会場：浄土宗應典院
内容：劇場から地域へ。なぜ劇場ではなく地域で演劇がなされるのかについて検討した。演劇 WS における主体間の役割分担内容をまとめることができた。

■ 第2回「コミュニティの力とは？」
日時：11 月 30 日
場所：枚方市立樟葉西小学校　図書室
内容：7 年前に校長への脅迫電話をきっかけに PTA が中心に地域防犯活動に取り組んでいる事例から、コミュニティ協議会の協力を得た地域から行政への政策実装化について取り上げた。

■ 第3回「自治のルールとは？」
日時：12 月 26 日
場所：宇治中央公民館
内容：議会基本条例の制定に積極的な市議会議員を話題提供者に招き開催した。地方自治法に定められた基本構想と個別計画の関係を手がかりに、単発の事業から施策へと展開する上で必要とされる手続きについて整理することができた。

■ 第4回「リーダーの役割とは？」
日時：3 月 7 日
場所：奈良市富雄地区
内容：2004 年 11 月 17 日に新聞配達員によって 7 歳女児が殺害された事件を契機に、地域ぐるみで集団登下校を企画・実施してきた奈良市の富雄地区で非公開にて実施した。自治連合会の会長による「反省と悔し涙が活動のエネルギー」という言葉は、リーダーによる政策化への深く、重く、堅い決意を見て取ることができた。

一連の対話から明らかになったのは記憶の「風化」に抗いつつ、一部で風化の「ための」実践がなされていることであった。「当該の出来事の意味が人々のコミュニケーションを通して一定の方向へと収束し、共有され、定着していく過程」が風化であり、「単なる忘却の過程ではない」とする指摘だ。すなわち本研究においては、演劇 WS はまさにこの「風化」の過程を地域で促進する実践として捉えていくこととする。

23 年度　社会実験と連動した研究会「プチタウンミーティング」

継続的な意見交換の要請をいただいていた大阪府枚方市を中心に、社会実験に連動する形でのヒアリング、検討を重ねた。同様に、施策を提言するに当たって、様々な進展の見られる本プロジェクトのコンテンツについて、再び現場でのレビューを重ねた。そして、その知見の集約の場として、2011 年 12 月にプチタウンミーティングを行った。

日程：2011 年 12 月 4 日（日）
発表会：15:00～16:00
プチタウンミーティング：16:00～17:30
会場：樟葉西小学校体育館（発表会）＋図書館（プチタウンミーティング）

【プチタウンミーティング　主な出席者】
藤川大祐氏（千葉大学教育学部教授（教育方法学・授業実践開発））
メディアリテラシー、ディベート、環境、数学、アーティストとの連携授業、企業との連携授業等、さまざまな分野の新しい授業づくりに取り組む。本プロジェクトにはスーパーバイザーとして参加。
武田信彦氏　（『うさぎママのパトロール教室主宰　子どもの安全インストラクター』
蓮行（劇団衛星代表　大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任講師）
司会：山口洋典（立命館大学共通教育推進機構准教授／浄土宗應典院主幹）

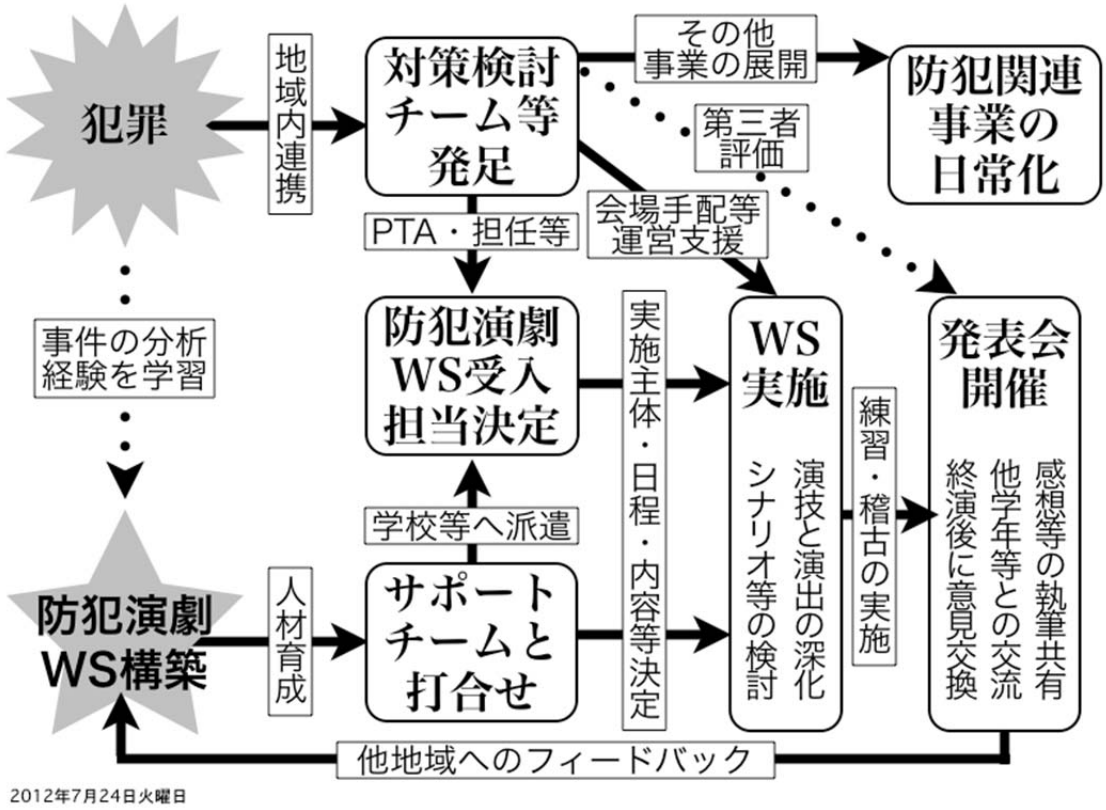
主　　催：NPO 法人フリンジシアタープロジェクト
共　　催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター
協　　力：樟葉西小学校／樟葉西校区コミュニティ協議会

社会実装モデルの検証

23 年度までに本プロフェクトで研究開発されてきたコンテンツの進展等を全面的にチェックするべく、各社会実験の現場をレビューした。
それらのレビューを重ねつつ、政策科学的な視点から、社会実験実施地域やプチタウンミーティング実施地域の特徴をみた場合、各地の状況があまりにも多様で、最大公約数的な「施策モデル」では、社会実装の為の有効なツールにならないと結論づけ、内容の方向性を修正した。

政策・施策の提言先を、自治体に絞らず、民間や自治会といった対象にも広げ、「民間→自治体」、「現場（学校等）→行政（教委等）」、「受益者（自治会や地域コミュニティ、PTA 等）→行政」と言った、様々な方向の提言で施策が実装される事を想定した、「社会実装企画パッケージ（映像資料と印刷物）」を作成することとした。

防犯演劇 WS の流れ（地域連携と効果）



「防犯演劇ワークショップ」は、防犯に関する「特効薬」ではない。しかし、現代において、過去に起きた犯罪に学び、新たな犯罪を防ぐために、地域の多様な人々が「自分事」として他者に関心を向けていくきっかけづくりとして最適な手法の一つであると捉えている。

以上の流れに示したとおり、「防犯演劇ワークショップ」の実践にあたっては、その導入を決定する地域の連絡協議会等（学校・PTA・地域住民など）と、劇団や NPO といった地域内外の効果的な連携が必須である。よって「防犯演劇ワークショップ」の効果は、実施を通した適切なチームワークの実践によって地域の現状が見つめ直される結果、防犯への意識が啓発されるという成果と、そうした成果がもたらされることによって地域内で「防犯演劇ワークショップ」以外の事業も含めて日常的な防犯関連事業が展開されるという波及効果が期待できること、さらに外部から参画した専門家集団に経験知が蓄積されることによって他地域での実践との相乗効果がもたらされるをもたらしていくこと、などが挙げられる。

防犯演劇 WS 導入・企画開発パッケージ作成

平成22年度・23年度に、自治体での制度化、条例制定などの在り方について、大阪市、枚方市、宇治市、奈良市等をフィールドに、PTA・自治体職員・警察官・地方議会議員の方々と共に検討を重ねてきた。その結果、自治体における制度化においては、基本となる「施策モデル」が機能しないであろうことが明らかとされた。理由として、

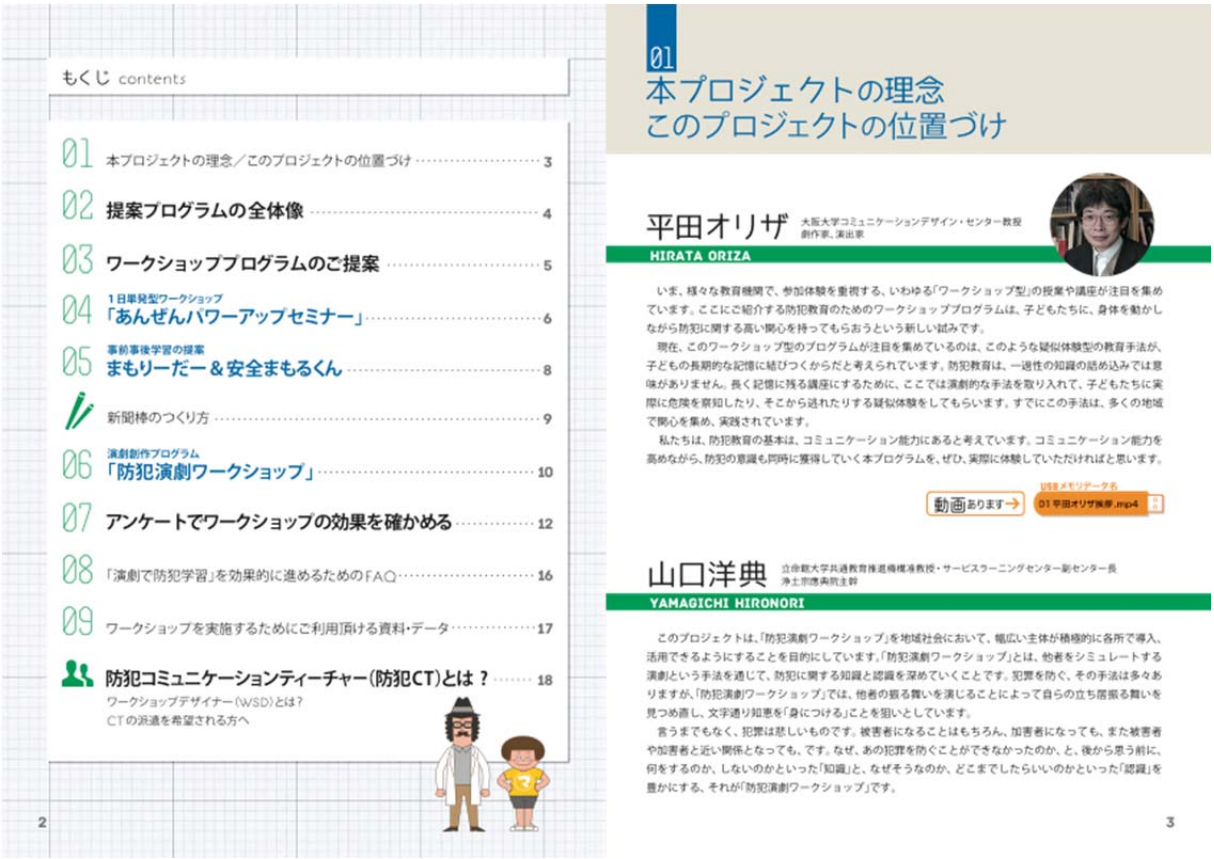
（1）自治体で条例化ということは、具体的な実装の為にはくくりとしては大雑把すぎる。

（2）施策レベルにおいて、自治体で決めたものをトップダウンで落としていくというのは、意思決定のスピードや財政状況から見て、現実的ではなく、自治体内の各地域の多様性に対応できない。

（3）各地の地域防犯プログラムの実装例・実施例をみてみると、起爆となる人材（コーディネータやコミュニティの中心人物）の存在が極めて重要であり、必要条件である。そういった人材から、ボトムアップで自治体に情報や提案が上がって行き、自治体を絡めた施策となる。という

共通性がある。
以上の3点が大きくは上げられる。
これらの知見から、「地域防犯について、何かやりたい・取り組みたい」という動機を持ち、ある程度コーディネータとしての資質も持っている、地域住民、保護者、PTA、教員の中の潜在的な「起爆と成りうる」人材が、具体的な施策に取り組めるだけの素材・知見・手法を提供する必要が明らかとなった。

本研究におけるグループ間の成果を集約し、既に実装できた現場で用いられている各種素材を「パッケージ」としてまとめた。
本プロジェクトの計画では「政策提言書」という名称を用いてきたが、コンセプトの見直しに伴い「防犯演劇WS導入・企画開発パッケージ」と名称変更することとする。


もくじ contents

01 本プロジェクトの理念／このプロジェクトの位置づけ …… 3
02 提案プログラムの全体像 …… 4
03 ワークショッププログラムのご提案 …… 5
04 1日単発型ワークショップ「あんぜんパワーアップセミナー」 …… 6
05 事前事後学習の授業 まもりーだー＆安全まもるくん …… 8
新聞棒のつくり方 …… 9
06 演劇創作プログラム「防犯演劇ワークショップ」 …… 10
07 アンケートでワークショップの効果を確かめる …… 12
08 「演劇で防犯学習」を効果的に進めるためのFAQ …… 16
09 ワークショップを実施するためにご利用頂ける資料・データ …… 17
防犯コミュニケーションティーチャー（防犯CT）とは？ …… 18
ワークショップデザイナー（WSD）とは？
CTの派遣を希望される方へ

2

01
本プロジェクトの理念
このプロジェクトの位置づけ

平田オリザ　大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授 劇作家、演出家
HIRATA ORIZA

いま、様々な教育機関で、参加体験を重視する、いわゆる「ワークショップ型」の授業や講座が注目を集めています。ここにご紹介する防犯教育のためのワークショッププログラムは、子どもたちに、身体を動かしながら防犯に関する高い関心を持ってもらおうという新しい試みです。
現在、このワークショップ型のプログラムが注目を集めているのは、このような疑似体験型の教育手法が、子どもの長期的な記憶に結びつくからだと考えられています。防犯教育は、一過性の知識の詰め込みでは意味がありません。長く記憶に残る講座にするために、ここでは演劇的な手法を取り入れて、子どもたちに実際に危険を察知したり、そこから逃れたりする疑似体験をしてもらいます。すでにこの手法は、多くの地域で関心を集め、実践されています。
私たちは、防犯教育の基本は、コミュニケーション能力にあると考えています。コミュニケーション能力を高めながら、防犯の意識も同時に獲得していく本プログラムを、ぜひ、実際に体験していただければと思います。

動画あります→ USBメモリデータ名 01平田オリザ挨拶.mp4

山口洋典　立命館大学共通教育推進機構准教授・サービスラーニングセンター副センター長 浄土宗慈眼院主幹
YAMAGICHI HIRONORI

このプロジェクトは、「防犯演劇ワークショップ」を地域社会において、幅広い主体が積極的に各所で導入、活用できるようにすることを目的にしています。「防犯演劇ワークショップ」とは、他者をシミュレートする演劇という手法を通じて、防犯に関する知識と認識を深めていくことです。犯罪を防ぐ、その手法は多々ありますが、「防犯演劇ワークショップ」では、他者の振る舞いを演じることによって自らの立ち居振る舞いを見つめ直し、文字通り知恵を「身につける」ことを狙いとしています。
言うまでもなく、犯罪は悲しいものです。被害者になることはもちろん、加害者になっても、また被害者や加害者と近い関係となっても、です。なぜ、あの犯罪を防ぐことができなかったのか、と、後から思う前に、何をするのか、しないのかといった「知識」と、なぜそうなのか、どこまでしたらいいのかといった「認識」を豊かにする、それが「防犯演劇ワークショップ」です。

3

別途添付（添付資料⑨「開発ハンドブック」）

3-4. 今後の成果の活用・展開に向けた状況

○コンテンツの社会実装
本プロジェクトで得られた知見を今後、継続的に実装していくための主体として、コンソーシアムを立ち上げ、プロジェクト終了後の活動の基盤を整備する。
本プロジェクトで研究開発した一連のプログラムは、文部科学省や自治体が推進する「コミュニケーション教育」関連のプログラムとの親和性も高く、国や自治体の予算費目の中でも、「防犯」関連の予算だけでなく「教育」関連予算を活用した実装を想定している。また、プロジェクト終了後は、民間企業の CSR の予算を活用した持続可能な施策としての、仕組みづくりにも取り組む予定である。公共・民間の両セクターから社会実装される可能性が高いと考えている。

○防犯 CT の活動
防犯 CT 育成プログラムを実施したことで、当初目標を超える数の防犯 CT が誕生した。彼らの

多くは、平成 24 年度に青森県教育委員会との提携により、青森県内の６カ所で、子どもたちだけでなく地域の大人たちをまじえた防犯 WS を行っている。また、神奈川県警察本部の依頼により、現役の警察官を対象とした安全ワークショップの紹介を行うなど、この３年間の活動を通じて得た知見を、子どもを中心としたコミュニティ再生にダイレクトに活かす機会を既に様々な形で実現している。今後も学校現場や PTA 活動からの WS 実施依頼に応えていくだけでなく、行政機関等との連携も視野に入れながら、防犯 CT の社会実装を積極的に進め、「地域防犯ネットワーク」の構築に向けて寄与していきたいと考えている。

○「防犯 CT 育成プログラム」の展開

CT の任を担える人材の確保は、防犯分野のみならず、現在全国各地で大きな課題となっている。数年前より先行して「ワークショップデザイナー育成プログラム」を実施している青山学院大学や大阪大学などにヒアリングを行いながら、防犯 CT 育成プログラムの社会実装に向けた準備を進めていく。また、大学等教育機関だけでなく、全国各地の文化系団体や地域の防犯活動を担う組織などとも協同する機会を得て、防犯 CT 育成のノウハウを多様かつ柔軟に変容・活用していきたい。

本プロジェクトに関わった研究員や CT は、福岡市文化芸術振興財団、町田市生涯学習センター、筑波大学といった様々な機関からの依頼により、演劇 WS を中心とした人材育成講座の運営に深く携わっている。そのいずれも、地域ごとに異なる課題に対応するためのワークショップが実施できることを大きな柱としており、なかでも「防犯／安全」は緊急性が高い課題と捉えられている。“地産地消”というように、地域の課題への取り組みを地域の人々が担う、という認識をどの地域も持ってはいるものの、具体的にどのように人材を育成し確保していけばいいのかという点で手詰まりになっていることが多い。防犯 CT 育成プログラムは、地域差なく実施できる部分と、地域特有の社会テーマや課題をダイレクトに取り込むことができる部分を兼ね備えており、その意味で汎用性が極めて高いため、社会実装が実現しやすいと考える。

3-5. プロジェクトを終了して

震災以降、「科学」そのものへの疑義が社会的に強まる中、演劇 WS という手法の効用の科学的な証明は、非常に困難を伴うものであった。
一方で、非常に挑戦的な試みであったと同時に、投じられた研究費に比しての成果も極めて大きいものがあったと自負しており、このようなプロジェクトに取り組むチャンスを与えられたことについては、心から感謝したい。
プロジェクト期間内に取り組むことができなかった課題については、今後とも継続してチャレンジしていき、並行して社会実装と人材育成を、手綱を緩めずに進めて行きたいと考えている。
日本では、芸術の持つ力の社会実装が圧倒的に遅れており、また未だに芸術と科学を対立すると考える向きも多く、その固定観念は国家的な損失を産んでいると考えている。このプロジェクトでは、「犯罪からの子どもの安全」というピンポイントに向けて絞り込んだアプローチが求められたが、期間終了後には、今回得られた知見を、そのような日本の「硬直状態」を解くための処方として、幅広く活かして行きたい、と意気込んでいる。

4. 研究開発実施体制

4-1. 体制

①統括グループ

氏　名	所　属	役　職	研究開発項目	参加時期
平田オリザ	大阪大学コミュニケーションデザイン･センター	教授	本研究の統括	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
蓮行	大阪大学コミュニケーションデザイン･センター	特任講師	本研究の統括	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
紙本明子	大阪大学コミュニケーションデザイン･センター	特任研究員	本研究の統括	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月

②防犯 CT 育成グループ

氏　名	所　属	役　職	研究開発項目	参加時期
平田オリザ	大阪大学コミュニケーションデザイン･センター	教授	本研究の統括	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
田野邦彦	有限会社アゴラ企画	研究補助員	CT 育成コンテンツの研究	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
わたなべなおこ	あなざーわーくす	研究補助員	CT 育成コンテンツの研究	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
佐藤誠	有限会社アゴラ企画	アルバイト	CT コンテンツ研究アシスタント	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
武田信彦	うさぎママのパトロール教室	主宰	コンテンツ監修	平成 22 年 4 月～平成 24 年 9 月
門脇　俊輔	NPO 法人フリンジシアタープロジェクト	フェロー	CT 育成プログラム実施(西日本担当)	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月

③防犯 WS コンテンツ開発グループ

氏　名	所　属	役　職	研究開発項目	参加時期
蓮行	大阪大学コミュニケーションデザイン･センター	特任講師	WS コンテンツ開発、研究	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
小林健司	NPO 法人 JAE	教育クリエイター	WS コンテンツ開発、研究	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
門脇俊輔	NPO 法人フリンジシアタープロジェクト	フェロー	WS コンテンツ開発　プロジェクトマネジメント	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
糸井登	立命館小学校	教諭	WS コンテンツ開発、研究	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
長谷川昭	立命館小学校	主幹	WS コンテンツ開発、研究	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月

吉川 裕子	立命館小学校	教諭	WS コンテンツ開発、研究	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
末岡妙子	枚方市立樟葉西小学校 PTA 副会長	副会長	WS コンテンツ開発、研究	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
中山 芳一	岡山県学童保育連絡協議会	副会長	WS コンテンツ開発、研究	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
渡邊裕史	NPO 法人フリンジシアタープロジェクト	ワークショップデザイナー	WS コンテンツ開発 スケジュール管理	平成 24 年 4 月～平成 24 年 9 月
阪本麻紀	NPO 法人フリンジシアタープロジェクト	コンテンツ監修	コンテンツ監修	平成 22 年 5 月～平成 24 年 9 月
武田信彦	うさぎママのパトロール教室	主宰	コンテンツ監修	平成 22 年 4 月～平成 24 年 9 月
黒木陽子	劇団衛星	WS 講師（CT）	WS コンテンツ開発、ファシリテーター	平成 22 年 4 月～平成 24 年 9 月
神屋晶子	NPO 法人フリンジシアタープロジェクト	アルバイト	資料作成サポート	平成 21 年 4 月～平成 22 年３月
谷井桂輔	NPO 法人フリンジシアタープロジェクト	アルバイト	資料作成サポート	平成 22 年 4 月～平成 23 年３月
楠海緒		アルバイト	資料作成サポート	平成 22 年 4 月～平成 22 年 9 月

④社会実験・評価グループ（テーマ別）

氏　名	所　属	役　職	研究開発項目	参加時期
坂野充	NPO 法人 JAE	教育クリエイター	社会実験の為のコーディネイト	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
小林健司	NPO 法人 JAE	教育クリエイター	社会実験の為のコーディネイト、報告書作成	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
松田雅子	NPO 法人 JAE	教育クリエイター	報告書作成サポート	平成 21 年 4 月～平成 24 年 9 月
木ノ下智恵子	大阪大学コミュニケーションデザイン･センター	特任准教授	コーディネイトサポート	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
長谷川　昭	立命館小学校	主幹	報告書作成協力	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
吉川　裕子	立命館小学校	教諭	報告書作成協力	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
糸井登	立命館小学校	教諭	報告書作成協力	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
末岡妙子	枚方市立樟葉西小学校 PTA 副会長	副会長	報告書作成協力	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
中山芳一	NPO 法人日本放課後児童指導員協会	副会長	報告書作成協力	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月

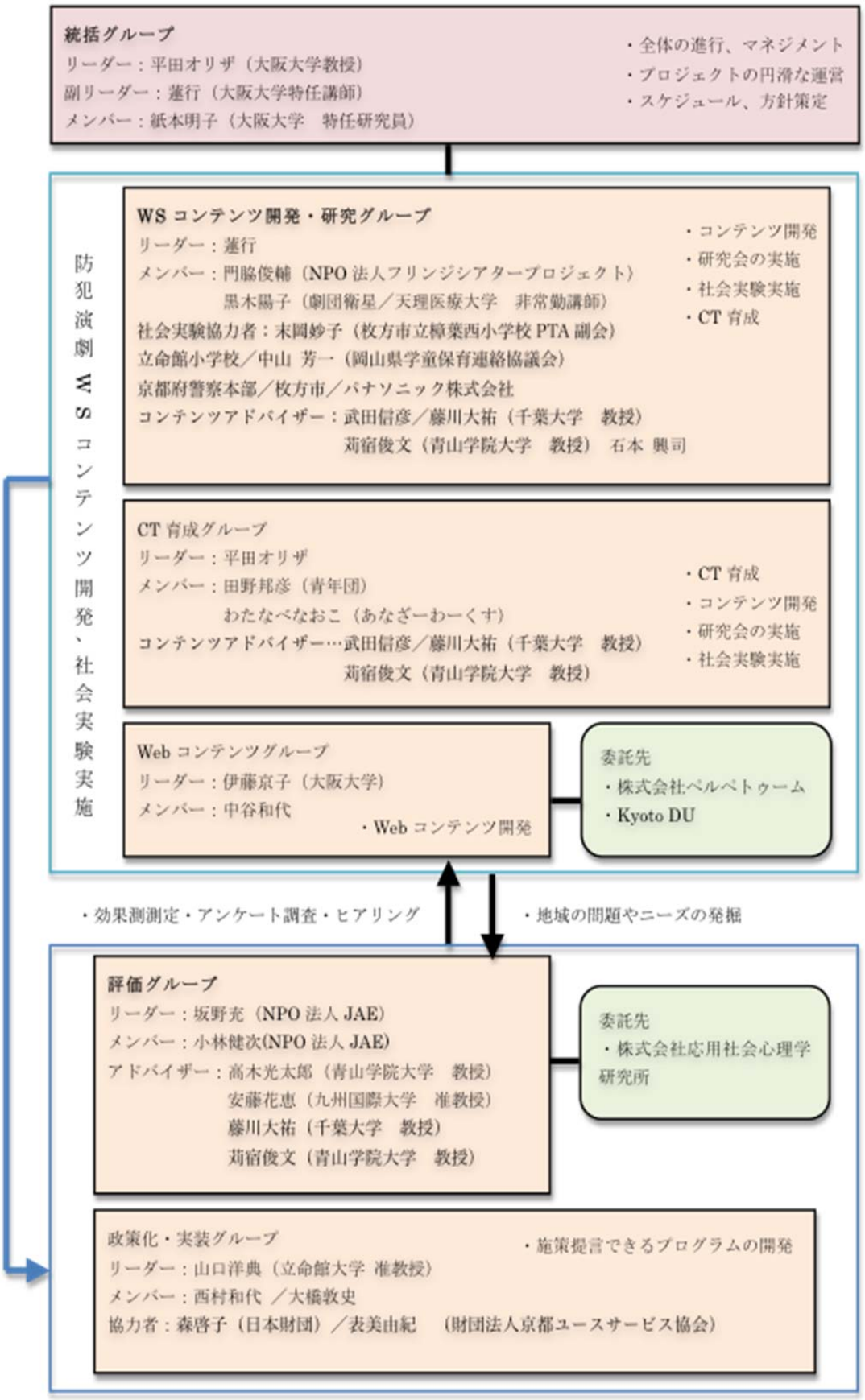
⑤政策化・実装グループ（テーマ別）

氏　名	所　属	役　職	研究開発項目	参加時期
山口洋典	立命館大学共通教育推進機構	准教授	施策推進を図るための調査、ヒアリング	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
蓮行	大阪大学コミュニケーションデザイン･センター	特任講師	施策推進を図るための調査、ヒアリング	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
表美由紀	財団法人京都ユースサービス協会	ユースワーカー	ヒアリング協力	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
木ノ下智恵子	大阪大学コミュニケーションデザイン･センター	特任准教授	ヒアリング協力	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
竹川勉	お客さまサービス事業部　企画課	課長	ヒアリング協力	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
森啓子	日本財団	総務グループファンドレイジングチーム担当リーダー		平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
西村和代	同志社大学ソーシャル･イノベーション研究センター		調査・ヒアリング・報告書作成補佐	平成 23 年 4 月～平成 24 年 9 月
大橋敦史	NPO 法人フリンジシアタープロジェクト		ヒアリング補佐	平成 22 年 4 月～平成 24 年 9 月

⑥Web コンテンツ開発グループ（テーマ別）

氏　名	所　属	役　職	研究開発項目	参加時期
伊藤京子	大阪大学コミュニケーションデザイン･センター	助教	Web コンテンツ開発、委託先への指示	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
蓮行	大阪大学コミュニケーションデザイン･センター	特任講師	Web コンテンツ開発，WS コンテンツとの連動設計	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
中谷和代	NPO 法人フリンジシアター		Web コンテンツ開発，WS コンテンツとの連動設計	平成 24 年 4 月～平成 24 年 9 月

4-2. 研究開発実施者


統括グループ
リーダー：平田オリザ（大阪大学教授）
副リーダー：蓮行（大阪大学特任講師）
メンバー：紙本明子（大阪大学　特任研究員）
・全体の進行、マネジメント
・プロジェクトの円滑な運営
・スケジュール、方針策定
防犯演劇WSコンテンツ開発、社会実験実施
WSコンテンツ開発・研究グループ
リーダー：蓮行
メンバー：門脇俊輔（NPO法人フリンジシアタープロジェクト）
黒木陽子（劇団衛星／天理医療大学　非常勤講師）
社会実験協力者：末岡妙子（枚方市立樟葉西小学校PTA副会）
立命館小学校／中山 芳一（岡山県学童保育連絡協議会）
京都府警察本部／枚方市／パナソニック株式会社
コンテンツアドバイザー：武田信彦／藤川大祐（千葉大学　教授）
苅宿俊文（青山学院大学　教授）　石本 興司
・コンテンツ開発
・研究会の実施
・社会実験実施
・CT育成
CT育成グループ
リーダー：平田オリザ
メンバー：田野邦彦（青年団）
わたなべなおこ（あなざーわーくす）
コンテンツアドバイザー…武田信彦／藤川大祐（千葉大学　教授）
苅宿俊文（青山学院大学　教授）
・CT育成
・コンテンツ開発
・研究会の実施
・社会実験実施
Webコンテンツグループ
リーダー：伊藤京子（大阪大学）
メンバー：中谷和代
・Webコンテンツ開発
委託先
・株式会社ペルペトゥーム
・Kyoto DU
・効果測測定・アンケート調査・ヒアリング
・地域の問題やニーズの発掘
評価グループ
リーダー：坂野充（NPO法人JAE）
メンバー：小林健次(NPO法人JAE)
アドバイザー：高木光太郎（青山学院大学　教授）
安藤花恵（九州国際大学　准教授）
藤川大祐（千葉大学　教授）
苅宿俊文（青山学院大学　教授）
委託先
・株式会社応用社会心理学研究所
政策化・実装グループ
リーダー：山口洋典（立命館大学 准教授）
メンバー：西村和代 ／大橋敦史
協力者：森啓子（日本財団）／表美由紀　（財団法人京都ユースサービス協会）
・施策提言できるプログラムの開発

4-3. 研究開発の協力者

氏　名・所　属・役　職（または組織名）	協　力　内　容
苅宿俊文（青山学院大学　教授）	防犯 CT 育成プログラム策定の助言
藤川大祐（千葉大学　教授）	コンテンツ開発、調査分析への助言
安藤花恵（九州国際大学　准教授）	調査、分析への助言
高木光太郎（青山学院大学　教授）	効果測定への助言
石本 興司	防犯 CT 育成の指導
京都府警察本部　防災・危機管理担当	社会実装、モデル授業へのアドバイス
京都府警察本部生活安全部　生活安全企画課	コンテンツ開発の助言
パナソニック株式会社	コンテンツ開発の助言
京都市教育委員会	社会実験の協力
枚方市　教育委員会	社会実験の協力
枚方市　危機管理室	社会実験の協力
立命館小学校	社会実験の協力
枚方市立樟葉西小学校	社会実験の協力
枚方市立香陽小学校	社会実験の協力
樟葉西校区コミュニティ協議会	社会実験の協力

5. 成果の発信やアウトリーチ活動など

5-1. ワークショップ等

年月日	名称	場所	参加人数	概要
22 年 8/17~19	丸の内キッズフェスタ 2010	東京国際フォーラム	約 260 人	イベント内で、本 PJ が「防犯」をテーマに WS を開催。
22 年 10/9	世田谷パブリックシアター土曜日劇場プレイパーク	世田谷パブリックシアター	約 20 名	あんぜんパワーアップセミナーを劇場主催で実施
23 年 1/20	長野中央少年警察ボランティア協会後期研修	長野市障害が学習センター	青少年パトローラー100 名	演劇を通じてパトロールの対応、対話を実践的に体験していく。
22 年 10/20	街型安全プログラム「セイフティ・ハロウィン」	中野区若宮児童館	大人 40 名 子ども 85 名	街歩きを通じて、地域の危険な場所を確認、助けを求める実践などを街を使って実施。

22年 2/20~3/5	演劇で学ぼう！防犯編「暴犯団から身を守れ！in枚方」	枚方市樟葉西小学校／きららホール	子ども29名 大人 200名	独立行政法人国立青少年教育振興機構　子どもゆめ基金の補助金をうけ、防犯演劇WSを実施した。
23年 1/14 2/27	CT育成研修会・コンテンツミーティング-柏木陽氏-	KAIKA（京都市内）	CT12名	柏木陽氏（演劇百貨店）を迎えて、CT研修会を行った。
22年 7/19	プチタウンミーティング第一回	浄土宗應典院	20名	第一回目は「社会実装とは？」をテーマ開催した。
22年 11/30	プチタウンミーティングin枚方	樟葉西小学校	30名	PTA、コミュニティ関係者をメインに「コミュニティのちから」テーマに開催した。
22年 12/26	プチタウンミーティングin宇治	宇治市中央公民館	10名	宇治市議会議員をゲストに「自治のルールとは？」をテーマに開催
23年 3/7	プチタウンミーティングin奈良	奈良市富雄公民館元町分館	5名	「リーダーの役割」をテーマに、た奈良市の富雄地区で非公開にて実施。
22　年 5/28	大阪教育大学：藤田大輔氏	JAEオフィス内	4名	先行知見についてのヒアリング
22年 6/2	兵庫教育大学：西岡伸紀氏へのヒアリング	JAEオフィス内	4名	先行知見についてのヒアリング
23年 3/4	CT育成研修会・コンテンツミーティング-伽羅氏-	KAIKA（京都市内）	CT12名	インプロビゼーションをテーマに、研修会を実施した。
23年 12/4	プチタウンミーティングin枚方	樟葉西小学校	30名	社会実験終了後、千葉大学藤川大祐教授をお招きして実施
24年 4/17	多文化共生プロジェクト	可児市文化創造センター	30名	外国人、地元住民を対象とした、あんぜんパワーアップセミナーを実施
24年 7~9月	世田谷パブリックシアター土曜日劇場プレイパーク	世田谷パブリックシアター	45名	護身術を用いた、防犯ワークショップを実施
24年 6/19	練馬区「学校応援団」のための安全講座	練馬区立大泉中学校	CT:4名／参加者約50名	あんぜんパワーアップセミナー実施
24年 7/5	練馬区青少年育成関地区委員会すこやか研修会	武蔵野市商工会館	CT:5名／参加者約60名	あんぜんパワーアップセミナー実施
24年 7/8	安全教室	杉並区立三谷小学校	CT:3名／1~6年生、PTA約90名	あんぜんパワーアップセミナー実施
24年 7/13	子どもの安全・安心実践講習会	青森県五戸町立南小学校	CT:3名／全校生徒、地域の大人、合計約60名	青森県教育庁生涯学習課主催 あんぜんパワーアップセミナー実施／指導者指導
24年 7/17	子どもの安全・安心実践講習会	青森県平内町立平内東小学校	CT：4名/4年生、地域の大	青森県教育庁生涯学習課主催 あんぜんパワーアップセミナ

			人、合計約60名	ー実施／指導者指導
24年7/18	子どもの安全・安心実践講習会	青森県五所川原市立金木小学校	CT:2名/4年生、地域の大人、合計約60名	青森県教育庁生涯学習課主催
24年9/27	子どもの安全・安心実践講習会	青森県野辺地町立馬門小学校	CT:2名／全校生徒、地域の大人、合計約80名	青森県教育庁生涯学習課主催
24年8/14	プロジェクトまとめ／防犯演劇WS研究会	KAIKA（京都市内）	15名	ゲスト：藤川大祐氏（千葉大学　教授）
24年8/16	プロジェクトまとめ／CT育成、評価研究会	KAIKA（京都市内）	15名	ゲスト：苅宿俊文氏（青山学院大学　教授）

5-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

○本プロジェクトの成果をまとめたサイトを公開

「演劇ワークショップをコアとした地域防犯ネットワークの構築」
（代表：平田オリザ）ウェブコンテンツグループ成果物ページ

演劇ワークショップ振り返りサイト「まもりーだー」デモサイト
http://www.fringe-tp.net/bouhanweb/archive/mamoreader

5-3. 論文発表（国内誌2件）

・蓮行／伊藤京子／紙本明子
「防犯教育におけるインタフェースとしての演劇ワークショップ」
・human Interface2010 BIWAKO 別刷り 2010年9月7日

・蓮行
「犯罪からの子どもの安全特集子どもの安全を守るインタフェース・演劇で防犯？！」
・ ヒューマンインタフェース学会誌　Vol.13　NO2　2011

5-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

学会名：ヒューマンインタフェース学会
子どもの教育のための「演劇ワークショップ」～その開発、効果、展開、評価に向けた検討～
場所：リンクスクエア（立命館大学　びわこ　くさつキャンパス）
日付：2010年9月7日
発表者：山口洋典（同志社大学大学院総合政策科学研究科）
タイトル　犯罪からの子どもの安全平田プロジェクト　政策化実装グループ
「地域ネットワーク構築を通じた政策実装化」

学会名：画像電子学会　第 7 回 安全な暮らしのための情報技術研究会
場所：大阪大学豊中キャンパス　オレンジショップ
日付：2011 年 3 月 11 日
発表者：山口洋典（同志社大学大学院総合政策科学研究科）
タイトル：地域コミュニティ政策における防犯演劇 WS の実装化プロセス

5-5. 新聞報道・投稿、受賞等

「あんぜんパワーアップセミナー」にて、第4回キッズデザイン賞2010フューチャーアクション部門優秀賞

2012 年 7 月 25 日発行の「防犯信州」にて、青森県教育庁生涯学習課主催「子どもの安全・安心実践講習会」紹介。

5-6. 特許出願

①国内出願（　0　件）
②海外出願（　0　件）